岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第404集

宮野目方八丁遺跡発掘調査報告書

みやのめほうはちょう

東宮野目二枚橋線整備関連遺跡発掘調査

岩手県花巻地方振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

宮野目方八丁遺跡発掘調査報告書

みやのめほうはっちょう

東宮野目二枚橋線整備関連遺跡発掘調査

序

本県は、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地を各地域に保有しております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県にとって、地域開発と社会資本整備とは重要な課題であるとともに、県民の切実な願いでもあります。しかし遺跡の保護・保存と開発事業とは相容れない要素を持つものであり、如何に両者の調和を保っていくかが今日的課題となっています。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場で、県教育委員会の指導と調整とのもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、一般県道宮野目二枚橋線の整備に伴って、平成13年度に実施しました宮野目方八丁遺跡の発掘調査成果を纏めたものであります。調査の結果、平安時代の溝跡と、所属時期は不明ですが、大規模な堀跡が確認されています。著名でありながらも、従前その実体が不明確であった宮野目方八丁遺跡について、貴重な資料を提示できたものと思います。

この報告書が考古学・歴史学の研究者のみならず、県民に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助となれば幸いであります。

最後に、これまで発掘調査や報告書作成に御援助・御協力を賜わりました花巻地方振興局土木部、花巻市教育委員会、県立花巻農業高等学校をはじめ関係各位に心より感謝を申し上げます。

平成15年1月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合田　武

例　言

1．本報告書は、花巻市葛第1地割68番1ほかに所在する宮野目方八丁遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．本調査は、東宮野目二枚橋線整備に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3．岩手県遺跡登録台帳に記載される遺跡番号は、ＭＥ 06－2269 、遺跡略号は、ＭＮＨ－01である。

4．野外調査の期間と調査面積・調査担当者は次の通りである。

期　　間；平成13年5月7日～6月4日

調査面積；850㎡

調査・整理担当者；文化財調査員　千葉正彦

期限付調査員　菊池　賢

5．室内整理作業は平成13年11月1日～平成14年3月31日まで実施した。

6．本報告書の執筆は、千葉正彦と菊池賢とが内容協議の上、主に菊池が行った。

7．基準点測量及び航空写真撮影は、下記の機関に委託した。

基準点測量；中央システム株式会社

航空写真撮影；東邦航空株式会社

8．野外調査では花巻市の下記の方々に作業員として御協力いただいた（敬称略／順不同）。

藤原庄四郎　佐々木達男　菅原久　八重樫昇　塚澤洋子　牛崎恵子　駿河和代　瀬川久美子　瀬川育子　鈴木忠子　谷川妙子　瀬川愛子　畠山友子　佐藤ヨシ子　太田エイ子　柳田良子　中島良子　高橋セイ子　照井鐵子　高橋スガ　新渕ツタ　根子集子　瀬川ナツ子　瀬川アキ　小原ハルエ

9．室内整理では遺物実測、トレース及び図版類の作成を当センター職員浅沼八千代が行った。

10．野外調査及び報告書作成に当たり、次の個人・機関に御協力いただいた（敬称略／順不同）。

藤井敏明（花巻市教育委員会博物館建設推進室長）、酒井宗孝・金田一尚子（花巻市教育委員会博物館建設推進室）、千葉　悟（花巻市教育委員会文化課）、岩手県立花巻農業高等学校、花巻市立図書館、岩手県立図書館

11．第10図の『稗貫郡宮野目村方八丁全図』は岩手県立図書館の所蔵資料を、同図書館の許諾を得て掲載するものである。掲載に当たり、便宜上凡例等についてごく部分的に修整を行っているが、図の大意を損ねるものではない。

12．「写真図版1・昭和23年の宮野目方八丁遺跡」は、国土地理院総務部総務課管理係の許諾を得て掲載する資料である。

13．第12～17図は、板橋源『宮野目方八丁調査報告書』（宮野目文化財保存会提供、花巻市教育委員会発行、1956年）の付図である。この資料はすでに大方失われてしまっているものであり、この度花巻市教育委員会博物館設立準備室の許諾を得て掲載させていただいた。

14．調査時における出土遺物や諸記録、室内整理に関わる諸資料は岩手県立埋蔵文化財センターで保管・管理している。

ー 目 次 ー

序／例言

〔 本 文 〕

Ⅰ．調査に至る経過 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 1
1．遺跡の位置 1
2．遺跡周辺の地形と地質 3
3．周辺の遺跡分布状況 3
4．基本土層 8
Ⅲ．野外調査の方法と室内整理 8
1．野外調査の方法 8
2．室内整理 10
Ⅳ．検出された遺構と遺物 12
1．遺構 12
(1) SD01溝跡 12
(2) SD02堀跡 12
(3) SKP 1 13
2．遺物 13
(1) 遺構内出土遺物 17
(2) 遺構外出土遺物 17
Ⅴ．まとめと考察 21
はじめに 21
1．過去の発掘調査成果の概要 21
2．宮野目方八丁遺跡をめぐる諸説 23
(1) 志波城跡説 23
(2) 磐基駅跡説 23
(3) 前九年合戦における頼義軍の陣場跡説 24
3．今次調査で検出された遺構について
ー方八丁全体におけるその位置ー 24
(1)『稗貫郡宮野目村方八丁全図』にみる
遺跡全体像 24
(2) 検出遺構の方八丁内における位置 27
4．考察 ー宮野目方八丁遺跡の性格についてー 29
(1) 38年戦争 29
(2) 稗貫地方の古代遺跡と蒲縫郡の成立 30
(3) 方八丁出土「酒殿」の墨書土器について 31
(4) 宮野目方八丁遺跡官衙説 31
まとめ 32

〔表〕

第1表ー1 周辺の古代遺跡一覧表（石鳥谷町） 6
第1表ー2 周辺の古代遺跡一覧表（花巻市） 7
第2表 出土遺物観察表 20

〔図版〕

第1図 岩手県における遺跡の位置と周辺地形図 2
第2図 遺跡周辺地形分類図 4
第3図 周辺遺跡分布図 5
第4図 遺構配置図 11
第5図 SD01溝跡 14
第6図 SD02堀跡 平面 15
第7図 SD02堀跡 断面 16
第8図 出土遺物・土師器 18
第9図 出土遺物・須恵器等 19
第10図 稗貫郡宮野目村方八丁全図 25・26
第11図 墨書土器「酒殿」実測図 31
第12図 参考図版 丘阜群分布図 34
第13図 参考図版 2号丘阜 35
第14図 参考図版 2号丘阜断面図 36
第15図 参考図版 竪穴住居跡 37
第16図 参考図版 竪穴住居跡出土土器 38
第17図 参考図版 鉄片・砥石 39

〔写真図版〕

写真図版1　昭和23年当時の宮野目方八丁遺跡（中央付近）　43
写真図版2　宮野目方八丁遺跡全景（現在）　44
写真図版3　調査区近景　45
写真図版4　SD01 溝跡　46
写真図版5　SD02 堀跡・1　47
写真図版6　SD02 堀跡・2　48
写真図版7　調査風景等　49
写真図版8　出土遺物（土師器）　50
写真図版9　出土遺物（須恵器等）　51

I. 調査に至る経過

宮野目方八丁遺跡は、一般県道東宮野目二枚橋線（通称、空港アクセス道路）の施行に伴って、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本事業は、花巻空港拡張事業に伴いターミナルビルが移転新築されることから、新たにアクセス道路が必要となったもので、岩手の空の玄関口として重要な役目を担うものである。

本地区は、平成11年9月より試掘調査を実施し、平成12年1月の試掘調査で埋蔵文化財が確認されたため、花巻地方振興局と岩手県教育委員会とで協議の結果、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。（花巻地方振興局土木部）

II. 遺跡の立地と環境

1．遺跡の位置

宮野目方八丁遺跡の所在する花巻市は県のほぼ中央、北上平野北部に開けた人口約7万人の岩手第3の都市である。北に稗貫郡石鳥谷町、東に和賀郡東和町、南に北上市、西に岩手郡雫石町・和賀郡沢内村と境を接している。市内を南北に東北新幹線、ＪＲ東北本線、東北自動車道、国道4号線の主要幹線が走り、岩手の空の玄関口・花巻空港を有する。現在沿岸地域へ延びる高速横断道が整備中であり、交通・物流の要として重要性が増してきている。

観光都市としての側面もまた注目される。西の奥羽山脈沿いには温泉地が開け、多くの湯治客で賑わっており、また、東方の丘陵上には詩人で童話作家の宮沢賢治の記念館があり、全国各地からファンが訪れている。

宮野目方八丁遺跡はＪＲ東北本線花巻空港駅の東約1.3km、北上川右岸に所在する（第1図）。現在遺跡の大半は岩手県立花巻農業高等学校（1952年県立）及び花巻空港（1964年開港）の敷地となっており土地改変を受けているものの、本来的には低位段丘面の東縁辺に相当する地を占地している。遺跡の東側は北上川の洗流によって崖が形成されており、崖下を北上川が南流する。遺跡の南側と北上川を挟んだ東側には北上川氾濫原が広がり、水田地帯となっている。

今回発掘調査の対象となった区域の地籍は、岩手県花巻市葛第1地割68番1　である。

遺跡所在地を図示する国土地理院発行地形図は次の通りである。

1：50,000地形図　ＮＪ－54－13－16　　花巻

1：25,000地形図　ＮＪ－54－13－16－1　石鳥谷

遺跡からは北東方向に北上山地の主峰・早池峰山（標高1917m）をはじめとして、薬師岳・中岳・鶏頭山などの山嶺群を仰ぎ見られる。また遺跡よりやや北に移動すれば、本県の最高峰・岩手山（南部片富士、標高2038m）を望むこともできる。調査区の標高値は約87m内外である。遺跡の北上川氾濫源との比高差は約5～10m程度、北上川との標高差は約15m程ある。

第１図　岩手県における遺跡の位置と周辺地形図

2．遺跡周辺の地形と地質

第2図に遺跡周辺の地形分類を示した。地形的には、市域東半中央には北上川が大きく蛇行して南流し、西には松倉山や円森山など標高200～900m級の山々が連なる急峻で起伏の大きな奥羽山脈の支脈をなす山地が連なる。東には比較的勾配が緩やかな標高150～250m前後の北上山地西麓の小丘陵や山地が張り出し、西縁に載る高松丘陵には宮沢賢治ゆかりの胡四王山を望むことができる。また市内の各所から小丘陵や山地の間に早池峰山を始めとする北上山地の高山の姿を垣間見ることができる。古代の人々もその麗しき姿に神々しさを感じていたに違いない。

遺跡の東を流れる北上川は、岩手・二戸両郡境七時雨山（1060m）や岩手町御堂観音に源を発し、南は宮城県石巻市にて大平洋に注ぐ、全長249km・流域面積10,250km²・支流数216の東北地方最長の河川である。花巻市内およびその周辺において、北上山地より西流する稗貫川・猿ヶ石川を、奥羽山脈より東流する豊沢川・瀬川・滝名川・耳取川・葛丸川などの諸支流を合わせて南流する。藩政時代には水運の要でもあった。

花巻市の市街地は北上川と猿ヶ石川・瀬川の合流点の南西側の、北上川氾濫原野・低位・中位段丘上に発達している。北上川氾濫原野は先に述べたように主として広汎な田園地帯となっている。

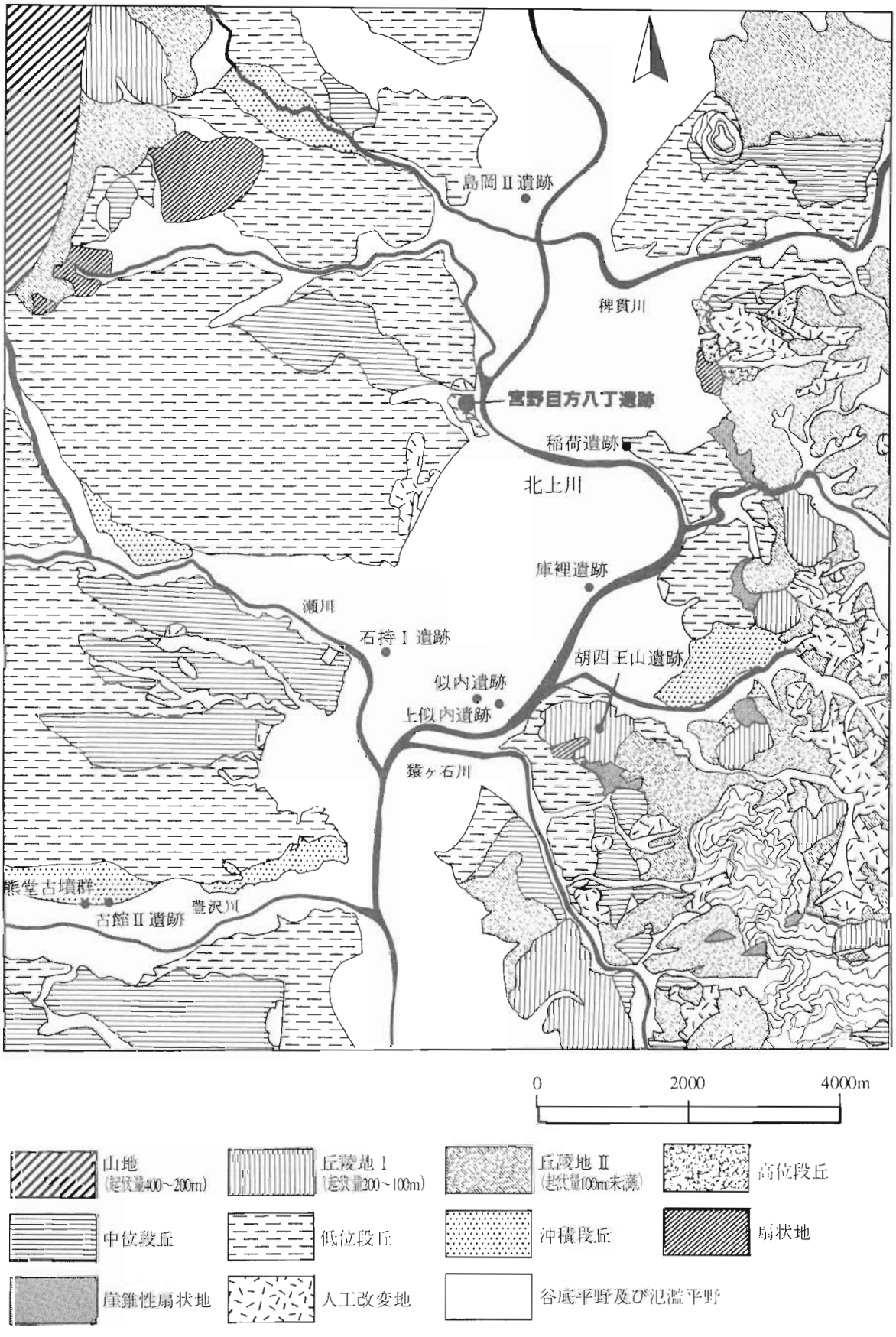
地質は、西側の奥羽山系には主に新第三期中新世のグリーンタフ活動による安山岩質～蛇紋岩質岩が砂岩や礫岩・頁岩を伴い分布するほか、更新世や第四紀の岩盤層が分布する。さらに、東側の北上山系には泥岩およびチャートよりなる古生代二畳紀の地層や中生代の花崗岩類、斑レイ岩類、蛇紋岩類、さらに中新世の安山岩類と鮮新世の砂岩、頁岩層が分布している。

参考文献　岩手県『北上山系開発地域　土地分類基本調査　花巻』1976年

3．周辺の遺跡分布状況

第3図に宮野目方八丁遺跡周辺の古代遺跡分布状況を図示し、第1表にその内容等を示す。これらによると、まず古代の遺跡は北上川及びその支流の氾濫平野・氾濫平野内の自然堤防上の微高地に数多く分布していることが知られる。胡四王山遺跡の如く丘陵地に所在するものや、第3図には含まれていないが、豊沢川によって形成された沖積段丘上に熊堂古墳群・古館Ⅱ遺跡・万丁目遺跡等が立地している例があるものの、一般に低位段丘面上には分布が僅少である点がこの地域の特徴として指摘できよう。これの要因が何によるか不明であるが、中でも宮野目方八丁遺跡は低位段丘面上に所在する数少ない遺跡である点が指摘され、そこに立地の特質の一つを求めることができる。また北上川の氾濫を受けない高位面に、広く平坦地を確保できる点も遺跡の占地に影響を与えたと考えることも出来るであろう。

ところで氾濫平野に多くの古代遺跡が分布するのは一体何に起因するものか今のところ定かではないが、水利に適した平野部は恐らくは古代においても農耕適地であり、「水陸万頃。蝦虜存生。」（『続日本紀』延暦8年7月17日条）と言われた胆沢地方と同様に水陸の田が広がり、稲作を生業の一部とした人々が暮らしていたものと憶測される。それを裏付ける水田跡などの遺構はこれまで花巻市内では確認されていないが、市内の似内遺跡において住居跡一棟の床面から微量の炭化米と炭化コムギ種子が採取されており、当時の食生活の一端を示唆している。今後の調査における新知見の増加に期待したいところである。



第２図　遺跡周辺地形分類図

1:50,000 花巻
1000m
0
1000
2000
3000
花巻空港
二枚橋
北湯口
西宮野目
東宮野目
石鳥谷
新堀
中寺林
大興寺
松林寺
長谷堂
富沢
北寺林
南寺林
黒沼
江曽
荒屋
八重畑
中村
東中島
中野
新幹線
東野
田力
細屋
庫理
才後
我生
上似内
下似内
北飯豊
天下田
松園町
浅沢
本舘
小舟渡
北万丁目
鞍掛
矢沢
添市
猪鼻
関口
大明神
十日市
広野
種森
片平
野崎
八幡
鳥岡
西中島
狼沢
六沢
東北自動車道
北上線
東北本線
花巻市
花巻大橋

第３図　周辺遺跡分布図

第１表－１　周辺の古代遺跡一覧表（石鳥谷町）

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地
1	白幡林古墳	古墳	古墳	古墳	中寺林
2	北向古墳群	古墳群	古墳		中寺林
3	八日市	散布地	縄文・古代	縄文（後期）・土師器・須恵器	北寺林
4	光林寺館	城館跡・散布地	縄文・古代・中世	縄文（後期）・土師・須恵器・堀	中寺林館前
5	大興寺 Ⅰ	散布地	古代	須恵器	大興寺第14地割
6	大興寺 Ⅱ	散布地	古代	土師器口縁部（聞き取り）	大興寺第14地割
7	沼の次	散布地	平安	土師器・須恵器	新堀
8	島	集落跡	平安	土師器・須恵器	新堀
9	明戸 Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器・須恵器	新堀
10	明戸 Ⅱ	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	新堀
11	明戸 Ⅲ	散布地	平安	土師器	新堀
12	明戸 Ⅳ	散布地	平安	土師器・須恵器	新堀
13	保沢川	散布地	平安	土師器・須恵器	新堀
14	久保 Ⅰ	散布地	平安	土師器・須恵器	新堀
15	久保 Ⅱ	散布地	平安	土師器・須恵器	新堀
16	久保 Ⅲ	散布地	平安	土師器・須恵器	新堀
17	塚原	集落跡	縄文・古代	縄文・土師器・須恵器・住居跡	新堀
18	宇洞	散布地	縄文・古代	縄文（中期）・土師器・須恵器	新堀
19	種森	散布地	平安	土師器・須恵器	新堀
20	幅	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器	新堀
21	百目木（どうめき）	散布地	縄文・平安	縄文土器（後期）・土師器	新堀
22	野沢川 Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器	新堀
23	上野々	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器	新堀
24	幅次	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器	戸塚
25	番屋	散布地	古代	土師器片	八幡
26	島岡 Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器片・土師器片	八幡
27	島岡 Ⅱ	集落跡	古代・近世	竪穴住居・近世家屋・土師器・須恵器	八幡
28	上十日市	散布地	平安	土師器	関口
29	関口	散布地	古代	土師器・須恵器	関口
30	下十日市古墳群	古墳群	古墳	古墳	関口
31	塚の森 Ⅰ	散布地	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器	関口
32	塚の森 Ⅱ	散布地	平安	土師器	関口
33	七ツ森古墳群	散布地・古墳群	縄文・古墳	縄文土器・古墳・土師器	関口
34	七ツ森	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	関口
35	貝の淵 Ⅰ	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	関口
36	猪鼻	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	関口
37	猪鼻 Ⅱ	散布地	古代	須恵器	八重畑
38	端館	散布地・城館跡	平安・中世	土師器・須恵器	関口
39	下館 Ⅱ	散布地	古代	土師器片	関口
40	稲荷	集落跡	平安	竪穴住居跡・土師器・須恵器・刻書坏	八重畑
41	荒野	散布地	古代	土師器	八重畑
42	関口	散布地	古代	土師器	八重畑
43	宿	集落跡	縄文・古代	縄文土器・土師器	八重畑
44	蛇蜒蛆（じゃのめり）	散布地	平安	土師器	五大堂

第１表－２　周辺の古代遺跡一覧表（花巻市）

No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	所在地
45	佐渡川古墳群	古墳群	古墳	円墳21基以上・土師器	葛第1地割
46	**宮野目方八丁**	詳細不明	奈良～平安	竪穴住居跡・二重土塁・堀・溝・土師器・須恵器・鉄器・砥石	葛第1地割
47	上ノ山館	城館跡・散布地	縄文・古代・中世	縄文土器（前中）・石器・堀・土師器・須恵器	葛第1地割
48	上ノ山	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	葛第2地割
49	源明Ⅰ	散布地	平安	土師器	葛第6地割
50	源明Ⅱ	散布地	古代	土師器	葛第6地割
51	馬立Ⅱ	散布地	古代	土師器	葛第11地割
52	葛	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	葛第13地割
53	馬立Ⅰ	散布地	古代	土師器	田力第14地割
54	庫理	集落跡	縄文・古代	縄文土器・竪穴住居跡・土師器	田力第7地割
55	東野袋	散布地	古代	土師器	田力第8地割
56	田力中野	散布地	縄文・古代	縄文土器・土師器	田力第10地割
57	狼沢Ⅰ	散布地	古代	土師器	狼沢第2地割
58	狼沢Ⅱ	集落跡	古代	土師器・竪穴住居跡・土坑	狼沢第8地割
59	遊子Ⅱ	集落跡	縄文・古代・近世	縄文土器・須恵器・古銭・建物跡	西宮野目第2地割
60	新屋	包含地	縄文・古代	石器・土師器	西宮野目第3地割
61	西中	集落跡	縄文・古代・近世	縄文土器・土師器・須恵器	西宮野目第6地割
62	三岳	散布地	古代	土師器	西宮野目7・11地割
63	石持Ⅰ	集落跡	古代	竪穴住居跡・土師器・須恵器	東宮野目9・10地割
64	石持Ⅱ	散布地	古代	土師器	東宮野目第10地割
65	本館Ⅰ	集落跡・城館跡	縄文・中世	縄文土器（晩）・石器・堀・竪穴住居跡	東宮野目第13地割
66	下西	散布地	古代	土師器・須恵器	似内第6地割
67	似内	集落跡	古代・縄文	土師器・須恵器・竪穴住居跡・土坑・縄文土器	上似内第10地割
68	上似内	集落跡・包含地	古代	土師器・須恵器・竪穴住居跡・土坑・縄文土器	上似内第10地割
69	下似内	散布地	古代	土師器・須恵器	下似内第10地割
70	我生	集落跡	古代	土師器・竪穴住居跡	上似内第4地割
71	下東	散布地	古代	土師器・須恵器	下似内第5地割
72	槻ノ木Ⅰ	集落跡・城館跡	縄文・弥生 古代・中世	縄文土器（晩期）・弥生土器・竪穴住居跡・堀・土師器	矢沢第2地割
73	胡四王山館	城館跡・集落跡	古代・中世	縄文土器・空濠・竪穴状遺構 土師器・須恵器・土製鞴口 砥石・古銭・二重空堀	矢沢第3地割
74	槻ノ木Ⅲ	散布地	縄文・古代		矢沢第3地割
75	上幅	集落跡	縄文・古代	石器・縄文土器・竪穴住居跡・土師器	矢沢第6地割
76	添市古墳群	古墳群	古墳	散逸した	矢沢第7地割
77	矢沢古堂	集落跡	古代	土師器・須恵器・鉄製鍬	矢沢第9地割
78	下幅	集落跡	古代	竪穴住居跡・土師器・須恵器	矢沢第9地割
79	矢沢八幡	集落跡・城館跡	古代・近世	竪穴住居跡・堀立柱建物・溝・土師器・須恵器・陶磁器・古銭・石器	矢沢第10地割
80	小松原	散布地	古代	土師器・須恵器	矢沢第11地割

参考文献　溜浩二郎・吉田真由美『上似内遺跡発掘調査報告書』（岩文埋調査報告書第379集　2002年）
溜浩二郎ほか『似内遺跡発掘調査報告書』（岩文埋調査報告書第344集　2000年）

4．基本土層

調査開始後、雑物撤去・刈り払い・立木伐採を行い、岩手県教委生涯学習文化課による試掘溝を復元して調査区内の土層を確認・検討した。その結果、次のような層序が認められ、これを当遺跡の基本土層とした。

Ⅰ層　表土層。層厚10～20cm。

Ⅱ層　褐灰色～にぶい黄褐色粘土質土層。層厚40～50cm。締まりが強い。人為的整地による層だが、金属ワイヤなどを含み、ごく新しく形成されたものである。概ね3層に細分され、上層は10YR6/1褐灰色土が主体、中層は10YR6/2灰黄褐色土が主体を、下層は10YR5/4にぶい黄褐色土が主体を成す。恐らくは花巻農業高等学校造成の際の整地層であろう。

Ⅲ層　10YR7/6明黄褐色粘土質土層。層厚40～100cm。地山土。遺構検出面。

Ⅳ層　10YR7/6明黄褐色砂礫層。層厚不明。基盤礫（段丘礫層）。

Ⅲ．野外調査の方法と室内整理

1．野外調査の方法

(1) グリッドの設定

グリッドの設定に当たって、平面直角座標第X系、X＝－62,628.000　Y＝26,750.000　を基準点1とし、X＝－62,628.000　Y＝26,778.000　を基準点2とした。そして基準点1から基準点2を主軸（中心線）として、基準点1から2m間隔で東方向にF・G・H・I・J～Zと、同じく2m間隔で西方向にE・D・C・B・Aとアルファベットを付し、また基準点1から2m間隔で南に向かって25・26・27・28と、同じく2m間隔で北に向かって21・20・19～1と算用数字を付した。これらアルファベットと数字との組み合わせによって調査区全体を2m×2mの升目で区画し、1A、2Aの如く表記・呼称することとした。（第4図）。

(2) 遺構名

遺構の名称は、遺構類型別に下記のように付けることとし、それら類型の検出順に01・02…と算用数字で番号を付すこととした。例えば「SD01」の如くである。

SA	柱穴列	SF	築地・土塁跡	SKP	柱穴状小土坑
SB	建物跡	SI	竪穴住居跡	SN	焼土・炉跡
SC	廊跡	SK	土坑	SW	炭窯
SD	溝跡・堀跡	SKF	フラスコ状土坑	SX	その他
SE	井戸跡	SKI	竪穴住居状土坑		

(3) 遺構検出までの経過と遺構精査について

調査開始後、遺構検出面及び同面までの深さ把握のために岩手県教委生涯学習文化課による試掘トレンチを復元した。その結果、表土直下に良く締まった整地の行われた面（以下「整地層」と呼ぶ）が存在することが確認された。この段階では整地層の性格が不明であったため、これが遺構である可能性をも考慮し、表土のみを重機によって除去する方針とした。

また調査開始当初、調査区西側縁辺に沿って杉木立が一列に植えられた、高さ70cmほどの土手の如き形状を呈する部分が存在していた。立木を伐採した後、この部位に試掘溝を複数個所設定し断面観察を行った結果、この土手状の高まりは杉を植えるためになされた単なる山砂の盛り土であり、杉の年輪から見て約20年ほど前の土木工事と判明した。よってこの盛り土も重機で除去することとした。以上のように慎重を期したのは、方八丁内にはかって大規模な土塁が存在していたことが知られていたため、その一部が残存した可能性を考慮したためである。

表土・盛り土を除いた後、盛り土直下から幅約1.3m、長さ約37mの暗渠排水が検出されている。底面に拳～人頭大の礫を敷き詰めたものである。精査の結果、この暗渠跡は整地層よりも新規のものであり、礫下の底面には数条の等間隔の溝が確認され、これはバックホーで浅い溝を掘った痕跡であることが判明した。即ちこの暗渠は極めて新しいものであり、遺構として登録をしなかった。

その後、整地層はその範囲の平面的把握に努め、範囲の平面実測なども行ったが、結果的には層中に金属ワイヤが混入するなど現代の新しい整地層であることが判明し、重機と一部人力による全面撤去を行っている。具体の時期を特定するに至らなかったが、恐らくは花巻農業高校造成に関わる整地土と思われ、これも遺構としての登録はしなかった。なお整地層中に僅かながら須恵器破片が混入していた。

以上の作業を経て最終的に検出された遺構は後述する溝跡・堀跡各1条、柱穴状小土坑1基である。溝跡は人力による埋土掘削を行い、平板測量で縮尺20分の1の平面図を作成した。堀跡は人為堆積層を重機によって粗掘りし、下位の自然堆積層を人力によって掘削した。その後に平板測量で縮尺50分の1の平面図を作成している。この際に柱穴状土坑も50分の1で平板測量を行った。断面図については溝跡は縮尺10分の1で、堀跡・柱穴状小坑土は縮尺20分の1で各々作成している。

遺構内遺物の取り上げは、適宜出土状況の写真撮影を行い、出土位置を図化した後、埋土土層ごとに行った。遺構外出土遺物については基本土層に基づく出土層位と出土グリッド名を記して取り上げている。

(4) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7cm判カメラ（モノクロ）を1台、35mm判カメラ（モノクロ、カラーリバーサル）を2台、このほかにポラロイドカメラとデジタルカメラを各1台メモ的な用途として使用した。撮影に当たっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に撮影し、整理時の混乱を防止した。また、調査終了後に遺跡全景の航空写真撮影を実施している。

2．室内整理

(1) 作業手順

遺構については調査現場で作成した実測図の点検・合成・第二原図の作成・トレース・図版作成の順に進めた。遺物については、水洗・接合・復元を行った後、仕分け・登録を行った。その後写真撮影・実測図の作成・トレース・図版作成の順に作業を行った。またこれら作業と並行して原稿の執筆を行った。

(2) 遺 構

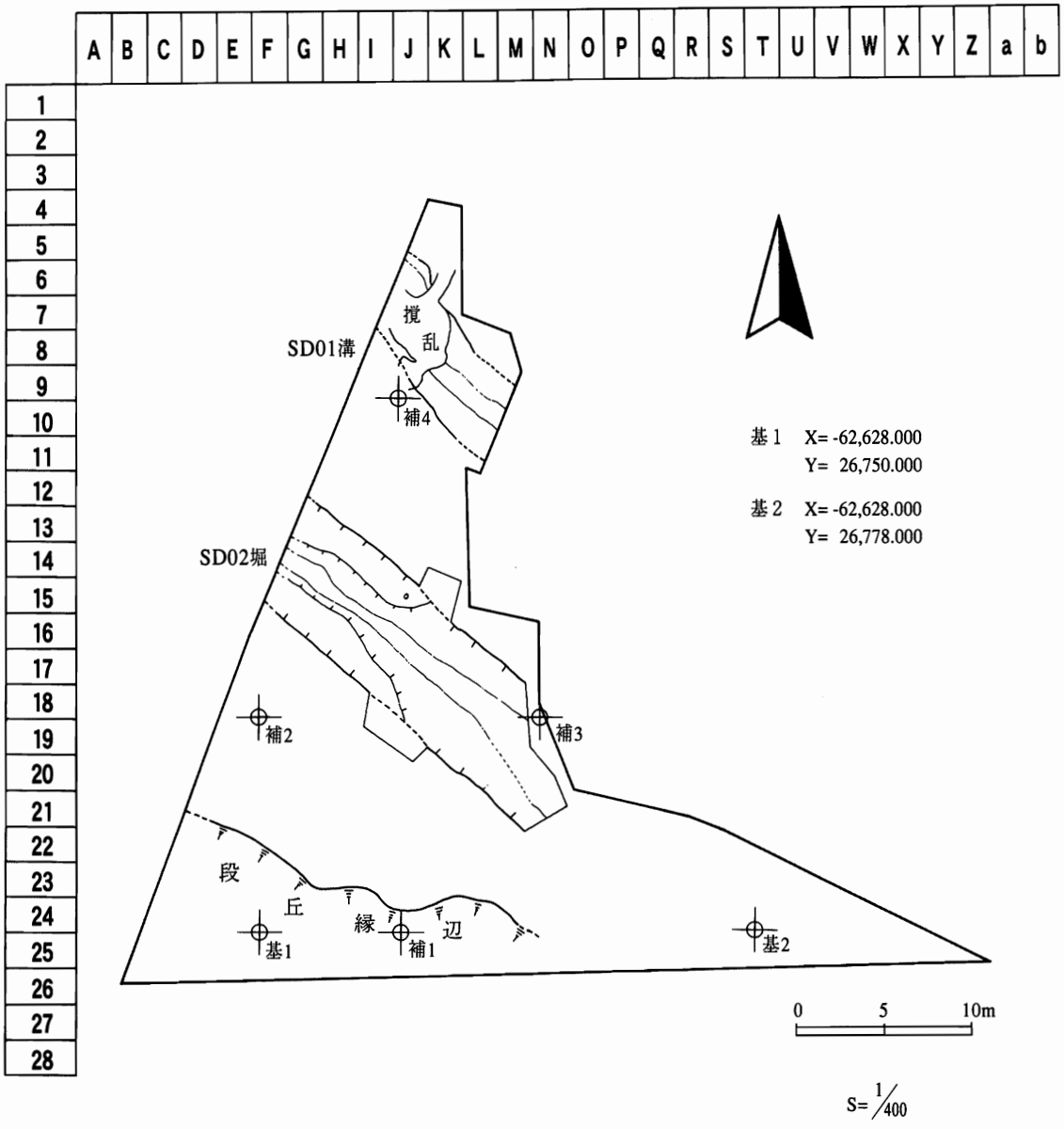
遺構図面の縮尺は、溝跡平面図を100分の1、堀跡平面図を125分の1で掲載した。また断面図は全て50分の1で掲載している。図面には各縮尺率とスケールとを付した。なお、遺構写真の縮尺は不定である。

(3) 遺 物

土器の実測図は、出土総量が少量且つ破片が多いことから、轆轤成形土器については反転実測を行ったものが多い。また一部破片について正面図を作成したものもある。なお土器実測図の掲載縮尺は3分の1である。石器剥片1点のみは原寸で掲載している。また遺物写真については概ね3分の1の大きさで掲載している。

(4) その他

その他の掲載図面については各々に掲載縮尺を付してあるので参照されたい。


A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z a b
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28
SD01溝
撹
乱
補4
SD02堀
補2
補3
段
丘
縁
辺
基1
補1
基2
基1 X= -62,628.000
Y= 26,750.000
基2 X= -62,628.000
Y= 26,778.000
0 5 10m
S= 1/400

第４図　遺構配置図

IV. 検出された遺構と遺物

1．遺構

今回の調査で検出された遺構は、平安時代の溝跡1条と時期不明の堀跡1条である。以下詳述を行う。

(1) SD01溝跡（第5図・写真図版4）

〈位置・検出状況〉

調査区の北端部付近において試掘トレンチによって黒褐色土の広がりとして検出された。6Ｊ区～11Ｌ区に跨って、北西方向から南東方向に走っている。

〈形状・規模〉

北西～南東にかけての長さ約10m分について検出されている。上幅は約4mを、深さ45cmを測るが、上部が削平を受けているためこれは本来の規模のものではない。底面は起伏が少なく概して平坦である。壁は底面から約20度で緩やかに立ち上がる。北西側は、導水管や暗渠排水の設置によって著しく撹乱されている。

〈埋土〉

にぶい黄褐色土、灰黄褐色土、黒褐色土を中心とした全て11層から成り、自然堆積の様相を呈している。

〈遺物〉

大半は埋土第6層、第7層の黒褐色土層から、および底面にはまりこむような状態で出土した。第5図に底面および底面付近の遺物出土地点を示す。土師器・須恵器が共に出土しているが、何れも破片が多く、かつ器面が摩滅し、割れ口も角が取れ丸くなっているものがほとんどである。なお出土遺物の詳細については別項にて述べる。

〈小括〉

今次調査における出土遺物の大半は当溝に伴うものである。底面出土遺物の形態は9世紀前葉のものと酷似しており、当溝の年代もそれに準じるものとみられる。底面地山にはまり込むようにして土器が出土する状況（写真図版4・遺物出土状況①）は、かつて当溝に水流が存在した乃至は水が満ちた状態であり、底面が軟化していたことを示唆しているとみられる。なお、当溝が人為的に造成されたものか、あるいは小川の如き自然流路であったかは定かでない。

(2) SD02堀跡（第6図、第7図・写真図版5、6）

〈位置・検出状況〉

調査区の中央部12Ｇ区～21Ｎ区にかけて北西方向から南東方向に走っている。15Ｋ～18Ｉ区に設定した試掘トレンチの断面形観察から堀跡と認定した。

〈形状・規模〉

北西から南東にかけて最大長約21m分が検出された。上幅は約6.5m、深さ約1.8mを測るが、ＳＤ０１と同様に上部が削平されており本来の規模のものではない。断面形は底面幅の狭いＶ字形で、底面から約30

度で立ち上がる薬研堀状を呈している。底面幅は西側においてより狭く、1.2 m～0.6 mほどである。東側ではやや広がって 2.0 m～1.4 mほどとなっているが、これはやや堀りすぎたことによる可能性があり、実際はもう少し狭かったかもしれない。南壁面には、底面から約65 cm上部において、東西長 8 m、南北最大幅約 1.0 mの平坦面が確認された。

〈埋土〉

調査区堺の断面①の第 1 層は、地山起源とみられる明黄褐色シルトが主体を成しており、短時間に一度に埋め戻されたことに起因する層である。知りうる範囲で、当遺跡に大規模な人の手が入ったのは花巻農業高校造成時、1952 年以降であるから、恐らくはその時に堀が埋められたのであろう。逆に言って、この堀は数十年前には掘り込みが現況で認識出来たものであったことが知られるのである。あるいは後述する方八丁内の大規模土塁を取り崩して埋めたものであったかもしれない。第 2 層は埋め戻される前の表層土であり、同層上面付近には植物遺存体（雑草である）が存在していた。この層の存在もまた、堀が自然堆積で埋まりきってはいなかったことを示すものである。その下層は自然堆積の様相を呈しており、上から明黄褐色砂質土、褐色砂、黒褐色土が順に堆積している。

中央部の断面②は、断面①より相対的に明瞭に分層するのが困難であったが、やはり下層は自然堆積の様相を示していた。上層部は人為的埋め戻し土や撹乱土であり、人の手が大いに加わっている様が看取された。

〈遺物〉

上層の人為堆積層から須恵器小破片が出土しているものの、自然堆積層からの遺物出土はなかった。

〈小括〉

時期を特定し得る遺物を欠くため、具体にいつの遺構であるか不明である。なお調査区外南東方向の林内（個人所有地）において土塁状の高まりと、埋没しきらずある堀状の落ち込みとが現況で確認できる。これは当遺構と一連のものであることが考慮されるが、詳述は「まとめ」の項で行う。

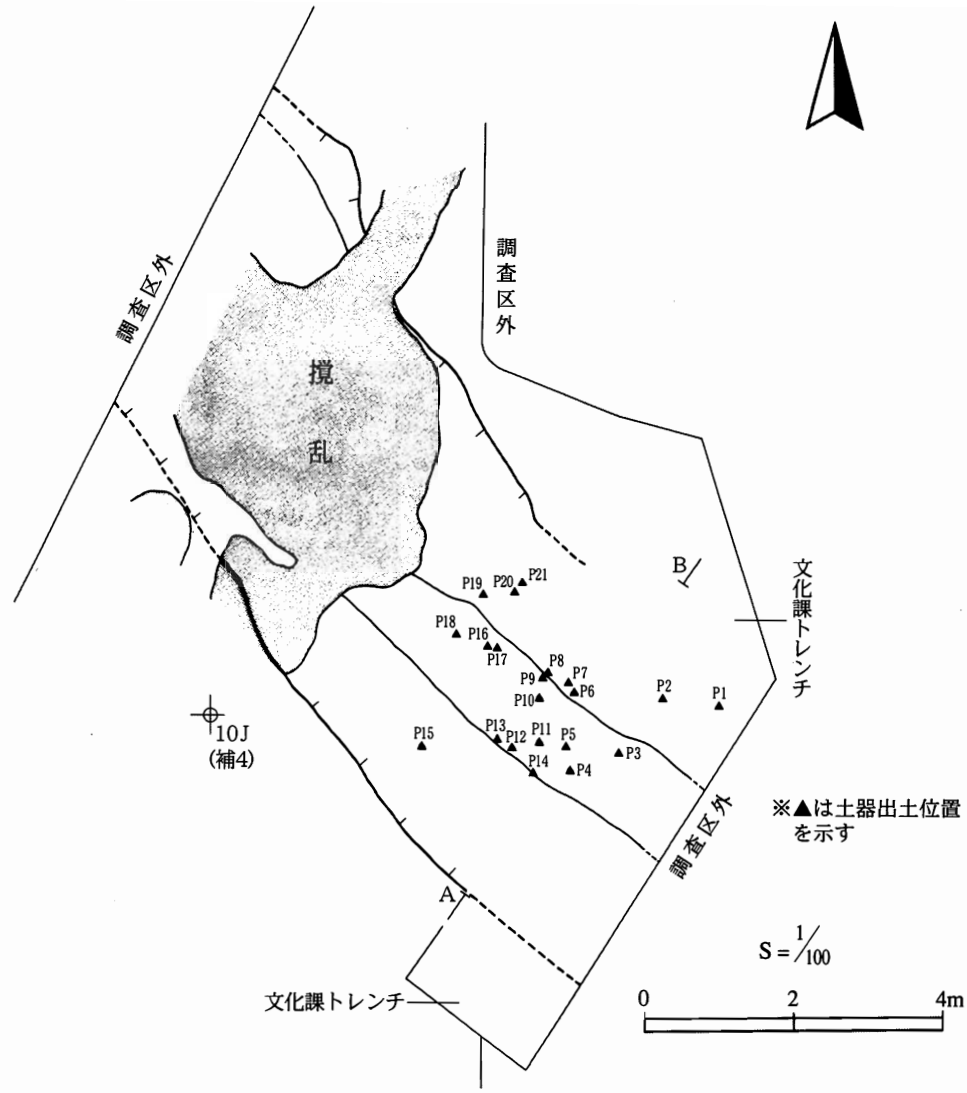
(3) ＳＫＰ１（第 6 図・写真図版 7）

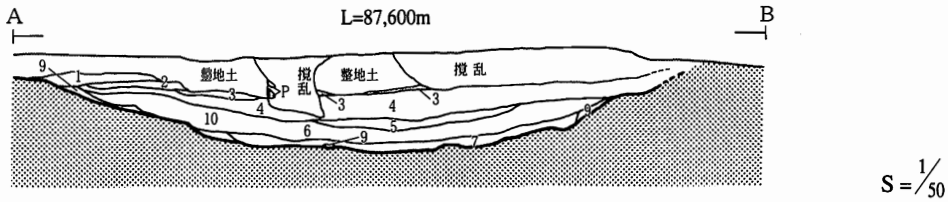
ＳＤ02 の北壁面上部で検出された時期不明の柱穴状小土坑である。平面形は直径約 20 cmの円形、深さは約 20 cmで、地山の明黄褐色土を掘り込んでいる。埋土は暗褐色土、黒褐色土の 2 層に分かれる。

検出当初、当遺構はＳＤ02 の壁面を掘り込んでいると見なされたことから、ＳＤ02 の橋脚跡の可能性が想起された。だが周辺に同様の小土坑は認められず、また対岸部においても検出されなかったことからその可能性は乏しいであろう。従ってその性格は不明であり、厳密に言ってＳＤ02 との新旧および併存関係も不明とせざるを得ない。遺物は出土していない。

2．遺物

今次調査で 40 リッターコンテナ 1 箱分の遺物が出土している。掲載した遺構内土器は、全てＳＤ01 溝出土の土師器・須恵器である。なお土器について、過去の調査報告書の記載内容を勘案すれば、製作技法・焼成状態・器種・器形等から複数の分類が可能と考えられるが、今次調査では出土量が僅少であることから分類を行わなかった。器面調整については図に直接記したものもある。掲載遺物個々についての詳細データは第 2 表に記している。時期は、土師器坏・須恵器坏の形態から、9 世紀前半と考えられる。

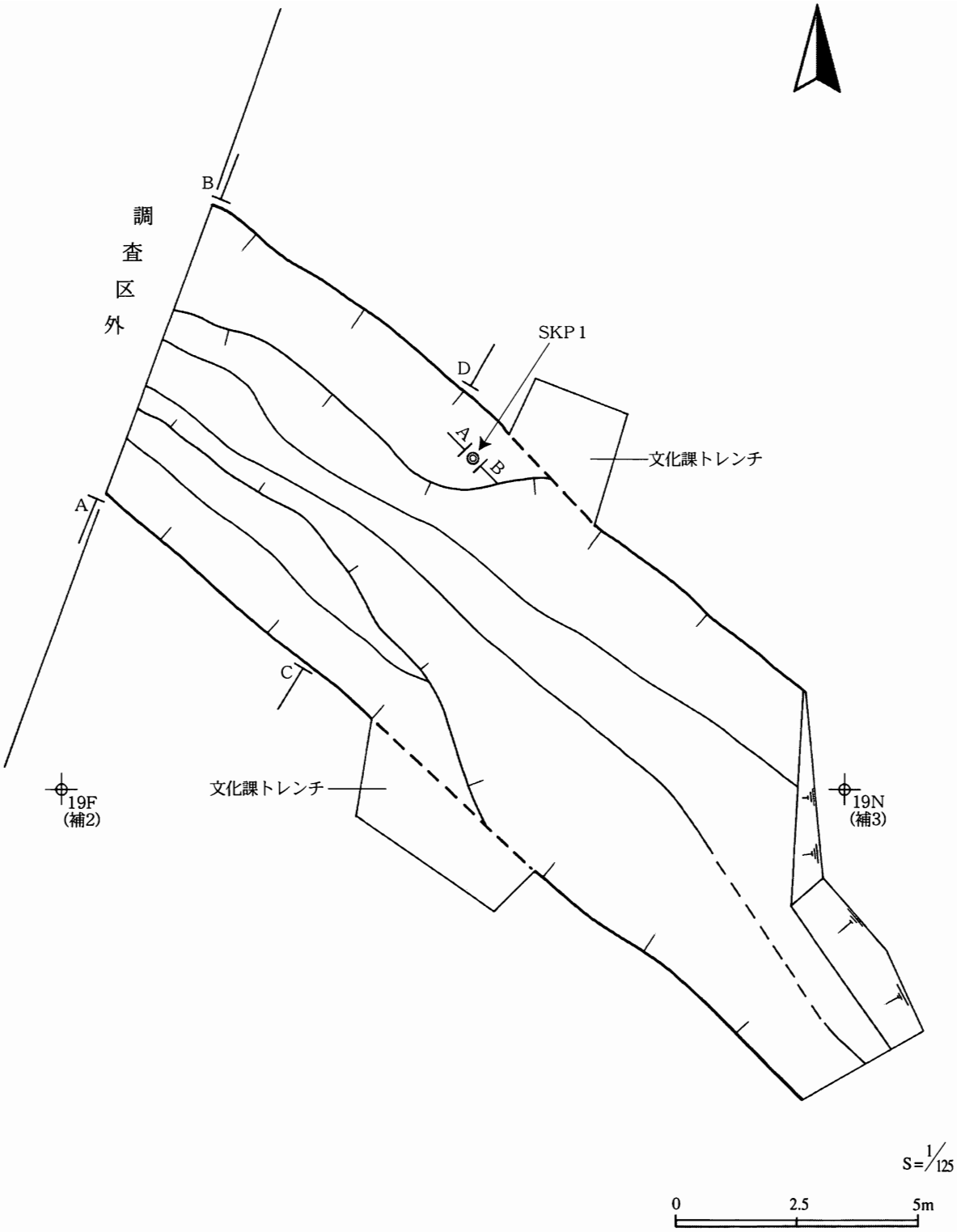




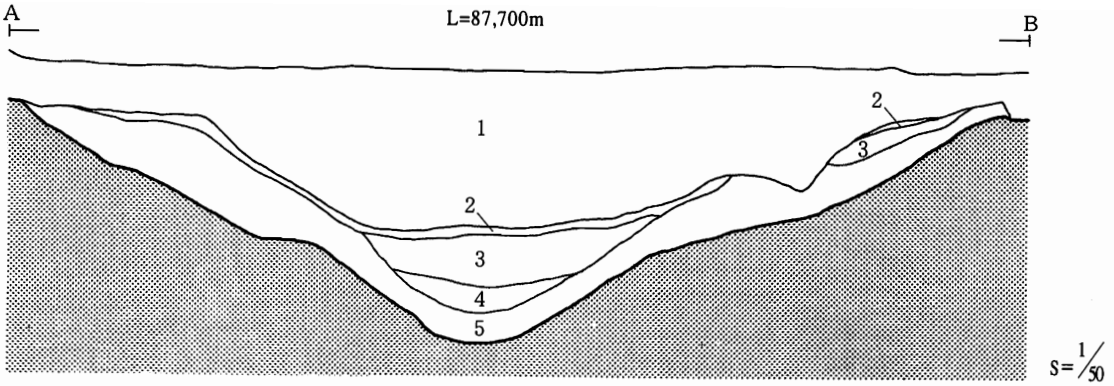
SD01溝

1. 10YR7/8 黄橙色粘土質土　粘性やや強　締まりあり　10YR5/2灰黄褐色土斑らに15%含む。酸化鉄粒微量混入。
2. 10YR5/2 灰黄褐色粘土　粘性強　締まりあり　炭化物粒１％混入。
3. 10YR6/1 褐灰粘土　粘性強　締まりややなし　炭化物５％混入。酸化鉄粒３％混入。
4. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土質土　粘性やや強　締まりややあり　酸化鉄粒10%混入。
5. 10YR5/2 灰黄褐色～10YR5/3にぶい黄褐色シルト　粘性やや弱　締まりややなし
6. 10YR3/1～3/2黒褐色シルト　粘性やや強　締まりややなし　酸化鉄５％混入。
7. 10YR3/2 黒褐色シルトと10YR7/4にぶい黄橙色砂質土の混合土　粘性やや弱　締まりなし　炭化物粒（相対的に他層より粒が大きい）10%混入。
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　締まりあり　地山崩落土か。
9. 10YR6/4 にぶい黄橙色シルト　粘性やや弱　締まりあり
10. 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土質土　粘性やや強　締まりややなし　10YR3/2黒褐色シルト25%混入。炭化物粒微量混入。

第５図　ＳＤ０１溝跡

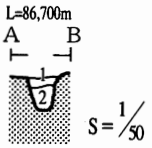


第６図　ＳＤ０２堀跡　平面



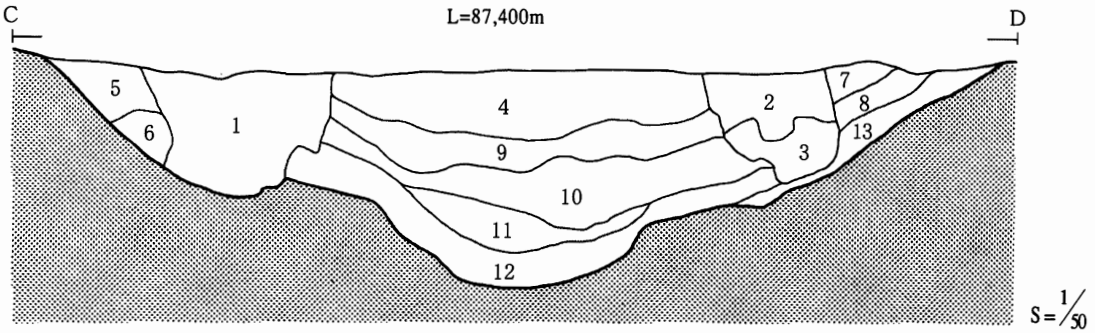
SD02堀　土層断面①

1. 10YR6/6 明黄褐色シルト主体をなす　粘性ややあり　締まりあり　層の上部は1～5cm大の小礫を多量に含む。また、層全体的にブロック状の10YR4/2灰黄褐色シルト混入　木根撹乱多し。人為的堆積（一度の埋め戻し）の様相を呈す。
2. 10YR2/1 黒色砂質シルト　粘性ややあり　締まりややあり　層全体に径1cm未満の小礫を含む。層上部に腐食しきらぬ雑草を含む。
3. 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト　粘性ややあり　締まりややあり　層全体に径1～2cm大の小礫多量に含む。
4. 7.5YR4/6 褐色砂　粘性なし　締まりややあり　層全体に径1～5cm大の小礫（3層よりも相対的に大きい）多量に含む。
5. 10YR3/2 黒褐色シルト　粘性ややあり　締まりややあり　層全体に径1cm未満の小礫をまばらに含む。酸化鉄粒多量に含む。10YR6/6 明黄褐色シルトを2%程含む。



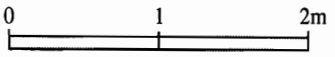
SKP1

1. 10YR3/3暗褐色シルト　粘性あり　締まりややあり
2. 10YR3/2黒褐色シルト　粘性あり　締まりなし　酸化鉄粒若干含む。



SD02堀　土層断面②

1. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘土、10YR7/6 明黄褐色粘土、5BG6/1青灰粘土の混合土層　粘性強　締まりなし　草根、酸化鉄粒、小礫多量に混入。
2. 10YR6/2 灰黄褐色粘土　粘性強　締まりあり　5Y6/2灰オリーブ色粘土混入。炭化物粒、小礫混入。
3. 7.5Y6/3 オリーブ黄色土と10YR5/1褐灰色土の混合土層　粘性強　締まりあり　草根、小礫少量混入。
4. 10YR6/6 明黄褐色粘土　粘性強　締まりあり（堅い）　10YR4/2 灰黄褐色土　10G7/1 明緑灰土ブロック状に混入。中礫少量混入。
5. 7.5YR4/3 褐色シルト　粘性やや強　締まりややあり　小礫、酸化鉄粒多量に混入。
6. 10Y6/2 オリーブ灰色砂質土　粘性やや弱　締まりなし　層上部に5Y2/2オリーブ黒色土40%含む。
7. 10Y7/1 灰白粘土　粘性強　締まりあり　10YR5/3にぶい黄褐色土30%含む。
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト　粘性やや強　締まりややあり　小礫、酸化鉄粒多量に混入。8層との界面付近は7.5YR4/2灰褐色土を含み、特に上部では腐食しきらぬ雑草が薄い層を成す。
9. 10YR7/8 黄橙色粘土、10YR5/6黄褐色粘土と10YR3/2黒褐色シルトの混合土層　粘性強　締まりややなし　生木(枝)、炭化物粒混入。
10. 7.5Y7/3 浅黄色粘土　粘性強　締まりなし　腐食しきらぬ雑草が少量混入する。
11. 5Y6/6 オリーブ色粘土　粘性強　締まりややなし　炭化草木やや多量に混入。
12. 10YR4/1 褐灰色粘土　粘性強　締まりなし　腐食しきらぬ雑草が多量に混入し、特に上層との界面付近で層を成している。
13. 10YR3/2 黒褐色粘土質土　粘性やや強　締まりややあり　酸化鉄粒混入。



第７図　ＳＤ０２堀跡　断面

(1) 遺構内出土遺物

〈土師器〉

1～6はいずれも坏である。全てロクロ成形による。1は磨滅しているが、底部にヘラによる再調整らしき痕がみえる。底径が7.5cmに復元される。2はコップ形を呈すとみられ、底径が6.0cmとやや小ぶりである。4は器面が摩滅している。3はロクロ台から切り離し後にヘラナデの再調整を受けており、底径が6.7cmに復元される。5はSD01の底面から出土した。底径が7.8cm、器高が4.35cmと計測され、口径は13.8cmと復元される。底部の切り離しは回転ヘラ切りである。6は底部破片で、回転糸切り痕がみえる。過去の調査時（昭和31年、同42年）には内面黒色処理された坏が出土しているが、今次調査では確認されていない。

7はロクロ成形の甕の底部とみられる。SD01の底面近くから出土した。底径が8.0cmで、底部はヘラで切り離した後にヘラナデの再調整を受けている。

8～10は甕である。全体の器形を復元できるものはない。8・9はロクロによる成形である。10はSD01溝の底面から出土した。内外ともに器面が磨滅しているが、ロクロ成形であろう。外面の一部にケズリらしき再調整痕がみえる。

11・12は非ロクロ成形の甕である。11が頸部から体部上半にかけての破片で、頸部にヨコナデ、体部にヘラナデ調整がみえる。12は底部から体部にかけての破片で、SD01の底面近くから出土した。体部にハケメ調整がみえる。

〈須恵器〉

13～15は坏である。13と14は口縁部の破片である。器形を復元できるのは15のみで、器高は4.2cmを計測し、口径が16.0cm、底径が9.6cmに復元される。

16は甕の体部破片とみられる。17は甕の口縁部であり、器面がやや磨滅・剥落している。19・20は甕の体部破片とみられ、外面に平行叩き目痕がある。19の内面には指の押圧痕がある。

18はSD01溝の埋土下位から出土した壺である。口縁から体部上半にかけて残存する。口径が13.0cm、残存器高は13.6cmである。一部の破片は整地層から出土しているが、これは本来SD01に伴っていたものが削平・撹乱を受けた際に移動したものであると思われる。

〈石器〉

23はSD01溝の埋土上部から出土した石器の剥片である。溝の中に流れ込み、混入したものではないかとみられる。

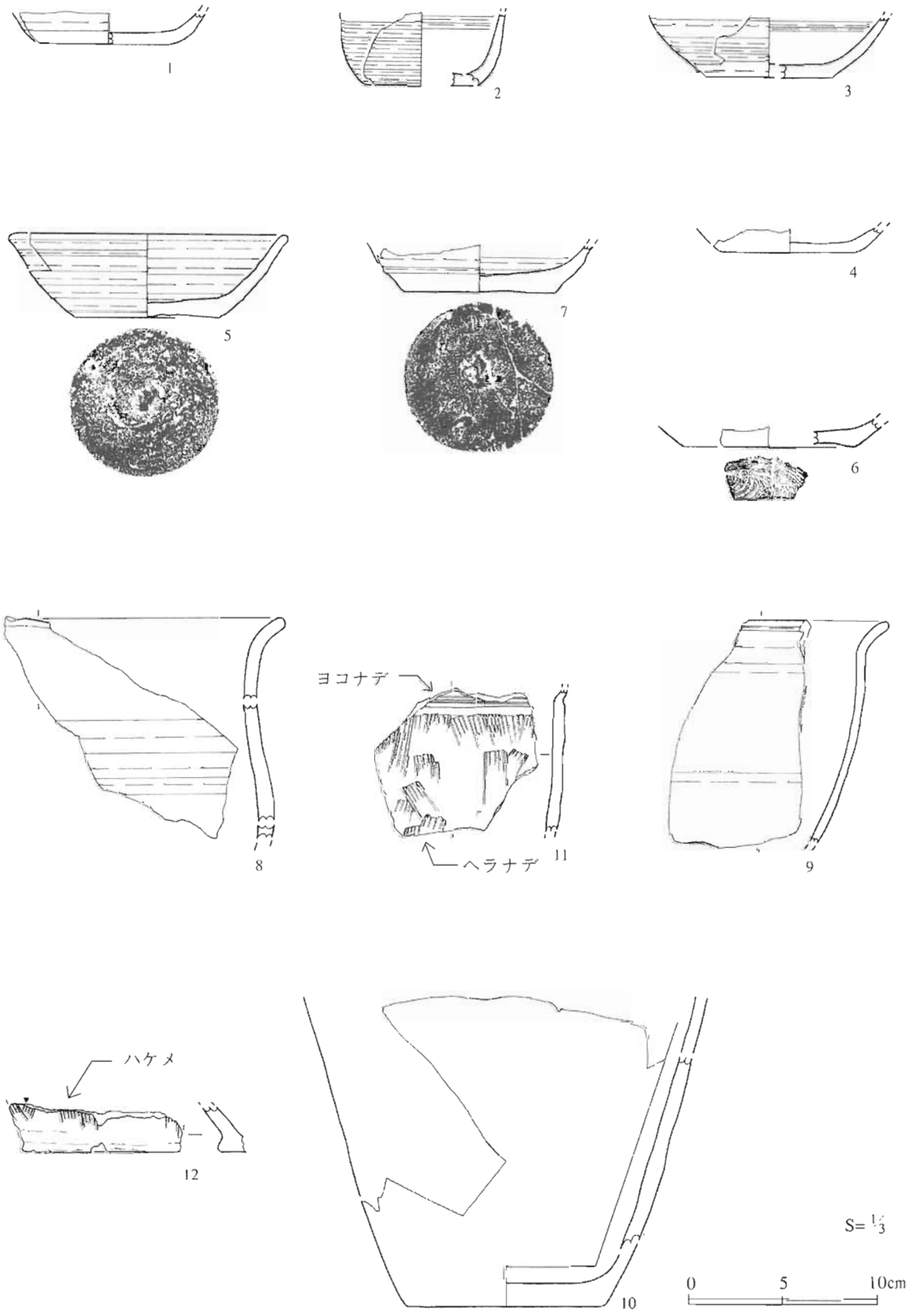
(2) 遺構外出土遺物

〈須恵器〉

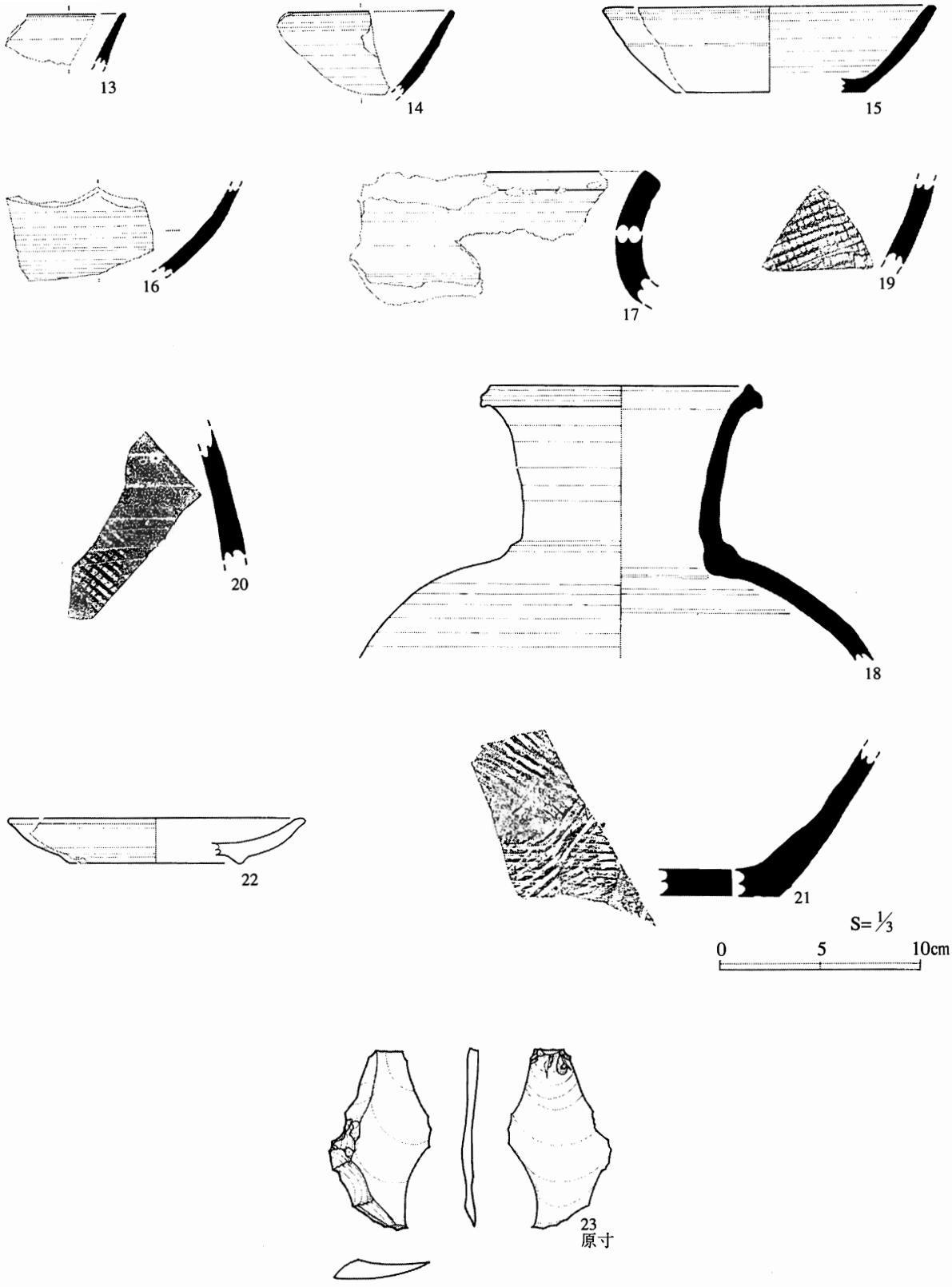
21はSD01溝を撹乱している導水管の北側で出土した須恵器甕の破片である。底部から体部下半にかけて残存する。外面に平行叩き目痕が、内面に指の押圧痕がある。また底部内面に自然釉が付着している。

〈近世陶器〉

22は調査区中央部の撹乱土中から出土した陶器の皿で、時代は近世とみられる。高台部は削り出しで製作され、内外面ともに釉薬がかけられており、灰白色を呈している。器高は2.3cmを計測し、口径が14.0cm、底径が8.6cmと復元される。



第８図　出土遺物・土師器



第９図　出土遺物・須恵器等

第2表
出土遺物観察表　（遺構内・土器）

No.	遺構名	出土位置	種類	器種	残存部位	外面調整	内面調整	底部切り離し及び調整	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
1	SD 01溝	埋土下位	土師器	坏	体部下半～底部	轆轤痕	不明（磨滅）	切り離し後篦調整	不明	(7.5)	不明	
2	SD 01溝	埋土下位	土師器	坏	体部下半～底部	轆轤痕	轆轤痕	不明（磨滅）	不明	(6.0)	不明	土器10
3	SD 01溝	埋土下位	土師器	坏	体部下半～底部	轆轤痕	轆轤痕	切り離し後篦調整	不明	(6.7)	不明	
4	SD 01溝	埋土下位	土師器	坏	体部下半～底部	不明（磨滅）	不明（磨滅）	不明（磨滅）	不明	7.4	不明	土器 4
5	SD 01溝	底面	土師器	坏	口縁～底部	轆轤痕	轆轤痕	回転ヘラ切りカ	(13.8)	7.8	4.35	土器 2
6	SD 01溝	埋土下位	土師器	坏	体部下半～底部	不明（磨滅）	不明（磨滅）	回転糸切り	不明	不明	不明	
7	SD 01溝	底面近く	土師器	甕?	体部下半～底部	轆轤痕	轆轤痕	ヘラ切り後ヘラナデ	不明	8.0	不明	土器11
8	SD 01溝	埋土下位	土師器	甕	口縁～体部上半	轆轤痕	不明（磨滅）	残存せず	不明	不明	不明	磨滅甚だしい
9	SD 01溝	底面近く	土師器	甕	口縁～体部上半	轆轤痕	不明（磨滅）	残存せず	不明	不明	不明	磨滅甚だしい
10	SD 01溝	底面	土師器	甕	体部下半～底部	不明（磨滅）	不明（磨滅）	不明（磨滅）	不明	10.5	不明	土器1　磨滅甚だしい
11	SD 01溝	埋土下位	土師器	甕	頸部～体部上半	ヘラナデ・ヨコナデ	ハケメ	残存せず	不明	不明	不明	非轆轤成形
12	SD 01溝	底面近く	土師器	甕	体部下半～底部	ハケメ	不明（磨滅）	不明（磨滅）	不明	不明	不明	非轆轤成形
13	SD 01溝	埋土下位	須恵器	坏	口縁部	轆轤痕	轆轤痕	残存せず	不明	不明	不明	
14	SD 01溝	埋土上～中位	須恵器	坏	口縁～体部下半	轆轤痕	轆轤痕	残存せず	不明	不明	不明	
15	SD 01溝	埋土上～中位	須恵器	坏	口縁～底部	轆轤痕	轆轤痕	切り離し後篦調整ヵ	(16.0)	(9.6)	4.2	
16	SD 01溝	埋土下位	須恵器	甕	体部	轆轤痕	轆轤痕	残存せず	不明	不明	不明	
17	SD 01溝	埋土下位	須恵器	甕	口縁部	轆轤痕	轆轤痕	残存せず	不明	不明	不明	やや磨滅・剥落
18	SD 01溝	埋土下位	須恵器	壺	口縁～体部上半	轆轤痕	轆轤痕・ナデ	残存せず	13.0	不明	不明	一部破片は遺構外出土
19	SD 01溝	埋土上～中位	須恵器	甕ヵ	体部	叩目	指押圧痕あり	残存せず	不明	不明	不明	
20	SD 01溝	埋土上～中位	須恵器	甕ヵ	体部	轆轤痕・叩目	ナデ	残存せず	不明	不明	不明	

出土遺物観察表　（遺構外・土器）

No.	遺構名	出土位置	種類	器種	残存部位	外面調整	内面調整	底部切り離し及び調整	法量（cm）			備考
									口径	底径	器高	
21	遺構外	導水管北側	須恵器	甕	体部下半～底部	叩目・ナデ?	指押圧痕あり	不明	不明	不明	不明	自然釉付着
22	遺構外	中央部撹乱層	近世陶器	皿	口縁～底部	釉薬	釉薬	高台部が削り出し	(14.0)	(8.6)	2.3	

出土遺物観察表　（遺構内・その他）

No.	遺構名	出土位置	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
23	SD 01溝	埋土上部	石器剥片	2.9	1.7	0.15	1.0	流れ込みヵ

V. まとめと考察

はじめに

宮野目方八丁遺跡（以下、方八丁と略記）は過去に3度の発掘調査が行われ、今次調査は第四次となった。この章では過去の調査成果とこれまでの方八丁をめぐる研究を総括した上で、今次調査の成果をまとめることとする。続いて、それをふまえた上で本遺跡の性格について予察を述べたい。

方八丁遺跡ではトレンチ調査やごく狭小な面積の調査が行われているに過ぎず、遺跡名が著名である割にその性格や範囲などについて不明な点が多い。ただし後述するように、特殊遺物の出土や巨大な堀、土塁の存在など注目すべき点が多いのもまた事実であり、一般の古代集落遺跡とは性格を異にし、東北古代史研究に新たな展開をもたらす可能性がある遺跡であると考えている。以下で述べる予察の当否は後の調査によって明らかになるだろうが、その際に幾らかでも資するよう方八丁に関して知り得る諸々の資料について提示した。資料の掲載に当たっては諸機関に便宜を図っていただいた。ここに感謝する次第である。

1. 過去の発掘調査成果の概要

ここでは過去の発掘調査成果について概観・整理しておく。かつて方八丁では岩手大学学芸学部（当時）の板橋源教授を中心とした調査団によって昭和31年4月8日から同12日までの5日間に第一次の発掘調査が行われている。[1] この時の調査は宮野目地区有志の懇情を受け、「今後本格的発掘調査を実施する歴史的価値があるのか」を判断するため、「簡易な現地踏査と出土品の地表蒐集並びに遺跡地域の想定を樹立する」、「遺跡の時代を考定する」ことを目的として行われた。その調査結果の概要は板橋氏によって次のように報告されている。なお後掲の第12～17図は、第一次調査報告書の付図である。当時の調査成果理解のため参考図として掲載した。

1. 竪穴住居跡が2ヶ所確認された。カマド位置はともに北東隅。（第15図）
2. ロクロ仕上げの土師器片が多数確認された。（第16図）
3. 須恵器片も多数発見された。
4. 大きな角釘かカスガイのような鉄片も2片だけであるが発見された。（第17図）
5. 砥石も2個発見された。（第17図）
6. 土師・須恵の焼成と形状は胆沢城跡出土のものと同類であるばかりでなく、砥石も同様であった。

第一次調査は5日間という短い調査期間のために主にトレンチ調査であったが、竪穴住居跡の存在が確認され、その精査が行われた。第15図は、その時精査された第1号・第2号竪穴住居跡の平面図と断面図である（第一次調査報告書付図）。削平を受けていて残存状況は良くなかったらしい。第16図はその住居跡出土の土器（甕・坏）の実測図である。4番は内面黒色処理されている。8番は須恵器である。第17図の鉄片は、共に第1号住居の床面中央から出土したものである。砥石2点は第2号住居床面出土のもので、石質は粘板岩である。なお、竪穴住居跡が具体的に遺跡のどこに所在していたのかは現在不明である。

調査目的の一つであった遺跡範囲の決定に関して板橋氏は、調査期間が短期間であったためにもとより不可能であったと述べている。その上で板橋氏は方八丁遺跡に関して、① 複合遺跡である、② 遺跡は約10度東偏する南北線をもつ方形プランであると想定される、③ 遺跡の東部は北上川によって欠損しているため東辺については知ることができない状態になっている、と報告された。① については方八丁内に残存する土塁の走行方位に一貫性がみられない点を根拠として挙げているが、② については何に基づいた見解なのか根拠を明示されていないため詳しく解らない。③ については江戸時代の遺跡近辺を描いた絵図と現況との比較によって指摘されており、確実とみられる。

第二次調査は同じく板橋源氏、佐々木博康氏、並びに板橋研究室学生らからなる調査団によって昭和41年10月6日から同9日までの4日間で行われている。(2) 第二次調査は方八丁内に花巻農業高校が移転することに伴い、遺跡内の土塁の一部が取り崩されることになったため行われた緊急発掘調査であった。調査は取り崩される土塁に範囲を限定して行われた。

調査した土塁は東北方向から西南方向に走るもので、高さ約3m、頂部上巾約3m、底部巾約15mの規模であったという。調査の結果、土塁は明らかに人工的に造られたものであり、自然地形ではないことが確認されたと報告されている。だが現在その土塁が方八丁内で具体的にどこに位置したのかは定かでないし、加えて翌年の第三次の調査によって、これは土塁ではなくて灌漑用溜池の堤であることが判明したと報告されており、ごく新しい土木工事により造られたものであったらしい。

第三次調査は岩手県教委を調査主体とし、やはり板橋源氏、佐々木博康氏、板橋研究室学生からなる調査団によって、昭和42年4月14日から同28日までの15日間で行われている。(3) 花巻農業高校移転工事の本格着工によってブルトーザーによる整地と校舎建設が行われることになったため、前年同様に緊急に調査が行われたのであった。報告書によれば、調査期間が短いこともあり、トレンチによる遺構の検出に主眼が置かれていたようである。トレンチは巾1m、長さ40～255mの長大なものが計8本設定・掘り下げられた。また北西から南東に延びていた「二重土塁」の調査と方八丁内に残る「塚」の調査があわせて行われている。調査成果の概要は次のように報告されている。

1. 長大な土塁は二重土塁であって、異比高のものと同比高のものとがある。
2. 昨年（注；第二次調査）調査した土塁は今回調査した長大な土塁とは異質なものであって、灌漑用溜池の堤であることが判明した。
3. 出土遺物は土師と須恵と砥石で、一片だけ縄文破片があったにすぎない。
4. 地域内の塚は古墳ではないことが明らかとなった。
5. 掘立式柱脚のホリカタが発見された。（注；二ケ所。1つは東西の長径1m、南北の短径70cm、深さ14cmの長方形。もう1つは東西の長径1.15m、南北の短径60cm、深さ30cmの長方形。）

以上の調査成果については後の考察で追々触れていくが、板橋氏は遺跡の時代について「土師・須恵などの出土土器からみて、平安初期から中期であって平泉時代まではくだるものではないことは明らかである。」と報告されている。

2．宮野目方八丁遺跡をめぐる諸説

この節では宮野目方八丁遺跡に関してこれまで提起されてきた研究史を概観・整理し、以下で考察を行う前提とする。

(1) 志波城跡説

陸奥国最北に位置する城柵である「志波城」は、東北縦貫自動車道建設に伴って、昭和51年～52年にかけて行われた盛岡市「太田方八丁遺跡」の発掘調査によってその地が所在地であることが明らかとなった。これ以前、宮野目方八丁遺跡は志波城跡の有力擬定地の一つと見られていた。

大正14（1925）年8月7日、東北帝国大学教授・喜田貞吉博士は稗貫郡宮野目村（当時）を訪れて、宮野目方八丁遺跡の現地踏査を行っている。大正15年8月1日の『岩手日報』朝刊紙は、「稗貫郡宮野目村方八丁の史蹟は屢（しばしば）次はん（ママ）學校教諭菅野義之助氏の調査があって或は今日まで所在不審であった志波城址はこゝではあるまいかと云い得るほどの有力な資料が続々発見」されたため、喜田氏が方八丁を踏査に訪れることとなったと伝えている。同新聞記事には続けて「該調査は志波城址確定に関する重大事実の発見を予期するもので斯界にとりては最も興味を以て期待されているのである。」とあり、喜田氏の踏査によって宮野目方八丁遺跡が志波城跡であるとの確証が得られる可能性があると考えられていたらしい。

『岩手日報』大正14年8月11日付夕刊紙によれば、実際の踏査におよんで喜田氏は「菅野氏の説明によりて一々実地を踏査して一崖一巌、一草一木にも非常な注意をはらひ、（中略）ソチコチとあるいた」というが、氏の方八丁に対する見解は残念ながら記事には載っておらず知り得ない。同記事によれば喜田氏の踏査に同行した菅野義之助氏は、当日地域住民に対して、方八丁から土師器・須恵器が出土しているから遺跡は「平安末期から鎌倉初期まで使用されたものである」と報告し、大規模土塁の残存する様子から方八丁が城柵の一つであろうことを暗に語っている。

方八丁が志波城跡ではないかと注目されていたのは－菅野氏の発言に端的に読みとれるが、土師器・須恵器を出土し、かつ大規模な土塁・堀を有する方八丁が、南方からの入植者の存在とそれらの人々の拠り所となる防御施設を有する遺跡と認識され、当時の城柵に対するイメージと合致したがためであろう。また方八丁という地名もまた、官衙の存在を推測させていたのではないだろうか。

(2) 磐基（いわき）駅跡説

雫石誠介氏が『宮野目郷土史談』中巻の中で、方八丁は古代の駅家「磐基駅」ではないかとの説を提示されている。[4]

磐基駅とは、『延喜式』巻二十八兵部省式の〔諸国駅伝馬〕に「陸奥国駅馬」として「（前略）玉造。栗原。磐井。白鳥。胆沢。**磐基**各五疋。（後略）」とみえるそれであり、胆沢駅より北方に設置された駅家である。磐基駅は『日本後紀』延暦23年（804）5月10日条に、

陸奥国言。斯波城與胆沢郡。相去一百六十二里。山谷嶮□。往還多艱。不置郵駅。恐闕機急。伏請准小路例。置一駅。許之。

とある志波城と胆沢郡との間の連絡を緊密にするために設置された駅がそれに相当するものと考えられる。

当該時期は胆沢のエミシが降伏し、北上盆地一帯に律令国家の支配が及んできたころである。しかし律令国家側がエミシ勢力の蜂起の可能性を完全に払拭しきれていなかったらしいことは史料に散見される。[5]

それが「機急」発生への懸念となり磐基駅の設置に繋がっていったものであろう。

雫石氏の説は、方八丁が志波城と胆沢城との中間として駅の位置に適合すること、また当時の交通路が北上川沿いに存在していたとの推定などに基づくものであるが、現在のところは確たる証拠を欠き、仮説にとどまっている。

(3) 前九年合戦における頼義軍の陣場跡説

方八丁について、盛岡藩士・大巻秀全（？－1801）の著とされる『邦内郷村志』(『南部叢書』所収）に次のような記述がある。

【史料】　『邦内郷村志』巻三　稗貫郡　東北上川　八幡懸

葛村　　高四百五十八石四斗八升一合　二百二石五斗八升六合　馬百十四疋　民戸百七軒。内八十六軒葛村。十軒細屋。十一軒遠野袋。

東北上川。西接湯本村・狼澤村広野。南庫裡上似内村。北黒沼村。此邊有安俵懸土澤町大迫懸往来之道。

（中略）

西北黒沼村界。野中有**方八町土手形**。是康平五年秋陸奥守源頼義攻安倍時之陣場也。安倍城在黒沼村之中。二三町許俗間相傳。此邊有安倍之伊疑利順橋迹云。未知其在處也。

「葛村（くずむら）」とは宮野目地区の現行地名・葛として残っており、「方八町土手形」とは宮野目方八丁遺跡を指すものであるとみられている。以上の記事が存在することから、葛村・方八丁の地名が少なくとも現在から200年は遡るものであることが知られる。また、「土手形」即ち土塁の存在が方八丁という地名の由来となっている可能性も示唆していると言えるだろう。

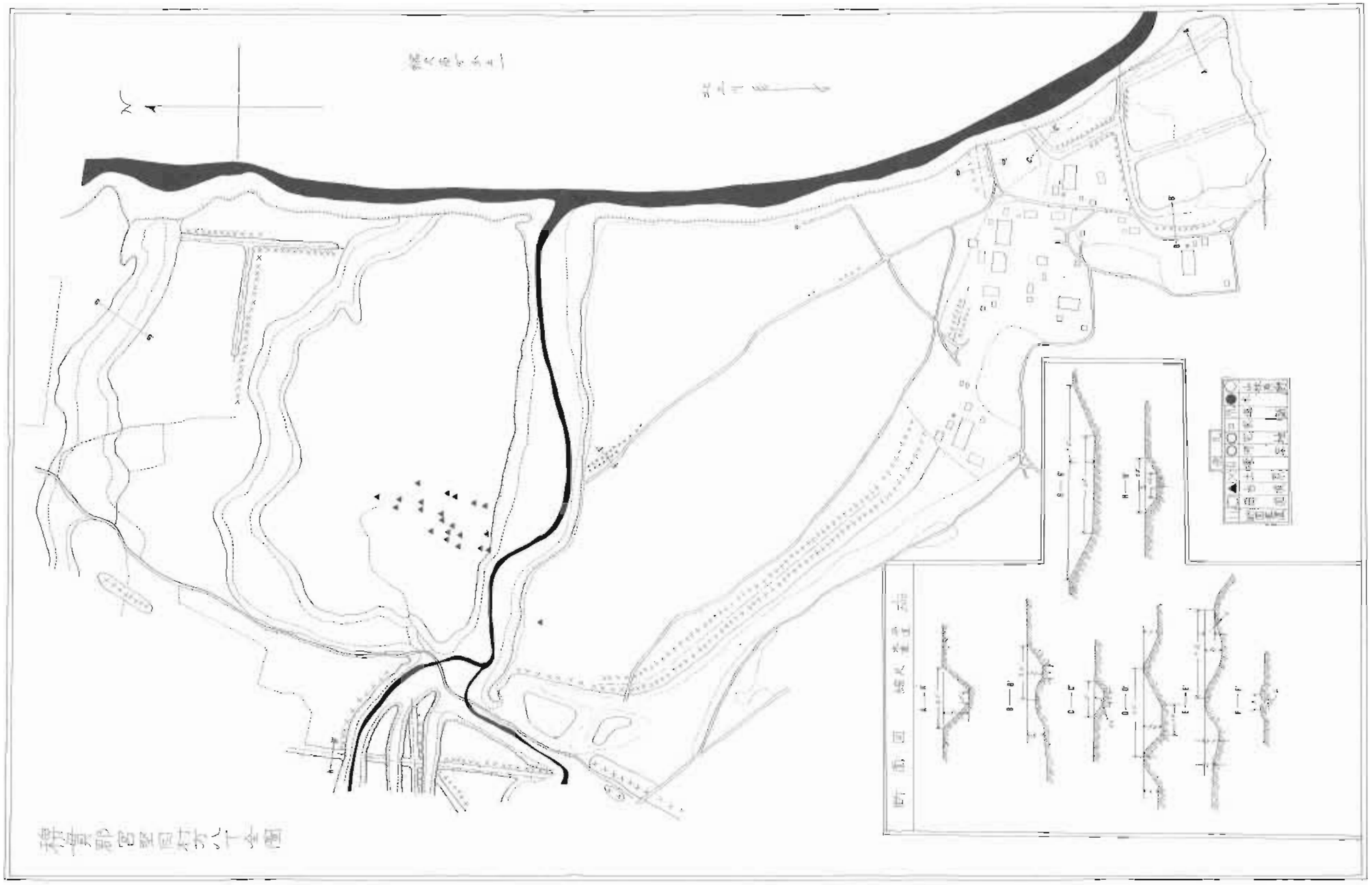
大巻秀全が記録した、方八町が前九年合戦における源頼義軍の陣場であったとの説は、果たしてそのような地域伝承が過去に存在していたのか、あるいは大巻が作為したものなのか今のところ不明とせざるを得ない。ただし『邦内郷村志』では葛村の項に続けて北の「黒沼村」の「矢根楯」について、これが安倍氏の砦であったことが述べられており、また矢根楯での源頼義にまつわる伝承が採録されている。このことはかつて黒沼村・葛村地域一帯に前九年合戦に関連した伝承が存在していたこと推測させるものであり、前者の方が蓋然性が高いかもしれない。しかしながら今のところ方八丁からの平安末期の考古遺物の出土は確認されていない。

3．今次調査で検出された遺構について－方八丁全体におけるその位置－

ここでは、今次調査で検出された遺構が、方八丁全体の中でどの部分に位置するものなのか、過去に確認されている遺構との関わりはどうあるのかについて検討し、調査成果のまとめとする。

(1)『稗貫郡宮野目村方八丁全図』にみる遺跡全体像

宮野目方八丁遺跡の全体像を考える上で重要な資料に、岩手県立図書館蔵『稗貫郡宮野目村方八丁全図』がある（第10図、以下『全図』と略称する)。この資料は、旧宮野目村が花巻町などと合併して花巻市が誕



第10図　稗貫郡宮野目村方八丁全図（掲載縮尺4500分の1 m）

生した昭和29年4月より以前の、昭和10年3月に地元の瀬川哲男氏によって作成されたものとのことである。この資料は遺跡が改変される以前の状況を知り得る上に、遺跡の全体的規模が示されており、現在の地形図と縮尺を統一し重ね合わせてみても概ね正確な地図である。ただし遺跡規模が何に基づいて示されているのかは定かではない。

『全図』についてやや付記すると、これは県立図書館が昭和42年に個人から購入したもので、実物には色彩が塗布されている。また「縮尺壱万分之一」と記されているものの、実際は一千分の一の縮尺であり、掲載に当たっては四千五百分の一とした。本図は県立図書館の許諾を得て掲載するものである。以下『全図』から読みとれる点を挙げていきたい。

『全図』によれば、方八丁は南北700メートル、東西300メートルに至る規模で、東流する小河川（佐渡川）及び東西に走る2条の堀ないしは河道・旧河道の如き落ち込みによって全体が3区域に画されているものであるらしい。これら河道等によって区画された範囲は南側が一番広く、北に行くにつれて狭くなっている。そして注目されるのは、遺跡の西辺から南辺にかけて二重土塁と堀とが累々と400メートル以上に渉り断続的に続いていく様子である。東辺は北上川の流れによって断崖となっており、土塁と堀もそこで途切れている。今日この土塁は大半が削平されてしまったが、昭和23年の遺跡直上の航空写真（写真図版1）には認めることができる。『全図』と対照してみていただきたい。

中央やや西寄りには22基の「古墳」が点在している。これは「佐渡川古墳群」である。第一次、第三次調査の際に発掘されており、第三次調査の報告で板橋源氏は、「古墳ではない」との結論を出されている。現在は消滅したために詳細については不明な点が多いが、第三次調査で墳丘を巡る溝の存在と、墳丘下部土坑の存在が確認されている。なお、後掲の第12～14図は第一次調査報告書の付図で古墳群の分布図・平面図・断面図である。

図の南東隅には、数条の堀によって区画された範囲が存在している。これは稗貫氏の家臣・葛氏の居城かとの伝承が存在する「上之山館」である。『全図』からは方八丁南辺の土塁と堀とがその北側の広い範囲を区画しているとみることができるのに対し、上之山館の土塁と堀とはそれとは別の区域を意識して区画し、複数の郭を形成しているように見受けられ、方八丁とは別の遺跡と考えてよいと思われる。

図の北東隅方向には、約5度東偏して南北方向に110メートル程延びる堀と土塁があり、それにほぼ垂直に西から約80メートル長の堀と土塁が連結している部分が見受けられる。また遺跡西端部には河道に切断され、約10度東偏して南北方向に190メートル延びる堀・土塁が存在する。それに東西に走る別の土塁と堀が連結している。現在この地域は私有地で立ち入りは出来ず、植物が繁茂している。よってこれらが如何なる性格の構造物ないしは遺構であるのか、或いは本当に堀や土塁であるのかは解らない。

(2) 検出遺構の方八丁内における位置

『全図』における今次調査区の位置は、西辺から南辺にかけて、北西方向から南東方向に延びている大規模な堀・二重土塁の概ね中間部分に相当している。即ち今次調査で検出されたＳＤ02堀は、『全図』にみえる二重土塁の狭間に存在する堀の一部であると考えられる。また調査では段丘の縁辺が検出されたが（第4図)、これも『全図』に確認することが出来る。調査時にはＳＤ02堀は『全図』に描かれた堀であると判明していたため、土塁の痕跡が残っていないか探っているものの、認められなかった。

先に、調査区外南東方向の林内において土塁状の高まりと、埋没しきらずある堀状の落ち込みとが確認で

きることを述べた。これも『全図』にある二重土塁・堀に位置的に合致するものである。つまりはＳＤ02堀との一連の遺構ということになる。下に残存する土塁・堀の現況写真を掲げた。写真の場所は私有地で、発掘調査時に地権者許可のもと踏査させて頂いている。

二重土塁と堀については第三次調査の調査結果が次のように報告されている。些か長いが重要なので引用しておく。

「内側（東北側）土塁の上巾は平均三メートル、高さ平均三メートル、基底部巾平均九メートルであって、土塁工法でいう土塁の基底巾三に対し、高さ及び上巾はそれぞれ一という割合に合致している。石材などによらずに人力だけで土積みした場合の、古来からの工法である。外側（南西側、低湿地にのぞむ側）土塁の上巾平均五・八メートル、高さ平均五・八メートル、基底部巾平均十七メートルであったから、これまた土塁基底巾三に対し高さおよび上巾はそれぞれ一という比率に合致している。しかし、ここに特記しておかなければならぬことは空堀のことである。ここの空堀は、中世城郭に施行された『空堀の上面巾と深さについて次の如き平均率、即ち、一・七（上巾面）：一（深さ）』という基準に合致しない雄大なものであるからである。ここの空堀上面巾は平均九・五メートル、深さ平均二・八メートルであるから、比率からいえば一・七をはるかにうわまわる三・四となり、いかにも雄大な空堀である。」

残存している土塁と堀

板橋源氏は以上のように説明した上で、二重土塁と堀は古代の遺構、具体的には出土遺物の年代と同時期の九世紀初頭の遺構である可能性があると述べている。今次調査ではＳＤ02堀の自然堆積土層から遺物の出土はなく、時期を特定するに至らなかった。

次にＳＤ01溝についてである。溝跡は昭和42年の第三次調査の際に、「東１地区」と称した区域に設定したトレンチによって検出されている。同年の調査では「昭和31年４月に弘渕神社西南方で発見された竪穴住居跡の付近の畑地」を「東１地区」と称していた。現在「東１地区」が方八丁内のどこに相当するのか不分明ではあるが、『全図』にある神社の位置は現在も変わっていない。このことからすれば「東１地区」は、およそ今次調査区とはかけ離れた場所とみるべきであろう。よって過去検出されている溝とＳＤ01溝の関連性は明らかではない。

ＳＤ02堀はもとより、ＳＤ01溝も調査区外に延びているので、この両者が如何様に延長していくものであるか把握が可能となれば、方八丁の正確な全体的規模や特質について一定の理解が得られるものと考えられる。

4．考察－宮野目方八丁遺跡の性格について－

先に遺物の項で、今次調査の出土遺物の年代は9世紀前半頃ではないかとみられると述べた。遺物の大半が出土したＳＤ01溝跡が機能していた時期も遺物の年代に準じるものと考えられる。過去の発掘調査で竪穴住居跡から出土した遺物も9世紀前半とみられることが報告されている。これらからすると宮野目方八丁遺跡は9世紀前葉の一時期に機能していたと考えることが出来るだろう。

岩手県における9世紀前葉の古代政治史は激動の道をたどっている。最後にそういった時代において宮野目方八丁が如何なる意味を持った遺跡であるのか、以上の検討をふまえて遺跡の性格についての予察を行ってみたい。

(1) 38年戦争

岩手県における8世紀後葉～9世紀前葉の時期は激動の時代である。それは列島北方地域に支配領域の拡大を目指す律令国家とそれに抗するエミシと呼ばれた人々との間で軍事的衝突がしばしば発生したためである。両者の衝突の中でも宝亀5年（774）7月の「海道蝦夷」による桃生城（宮城県河北町）攻撃事件に端を発し、後37年半近くにも及んで断続的に行われた所謂38年戦争は、古代岩手地方に多大な影響をもたらすことになった。

本県域に律令国家が大規模に侵攻した初めは、『続日本紀』宝亀7年（776）11月26日条に「陸奥の軍三千人を発して胆沢の賊を伐つ」とみえる。この前後には「出羽国志波村賊」と官軍との戦闘を伝える記事[6]や、宝亀8年4月に陸奥国軍が「山海両賊」を攻撃したらしいことを伝える記事が見受けられる。[7]恐らく律令国家は唐突に胆沢侵攻を企てたのではなく、一定の目的・計画性を以て、軍を発したのであろう。また『同』宝亀11年（780）2月2日条によれば、律令国家は胆沢のエミシからしばしば攻撃を受けていたらしいことが窺われ、これに対して胆沢エミシを遮るために城柵を造ろうとさえしている。そうやって胆沢エミシを遮蔽してしまうことが「両国の息ひは斯れより大莫し」[8]、つまり陸奥出羽両国にとっての安心はこれより大きなものは無いと認識されていたのである。律令制的支配領域の安定・拡張を目指す朝廷にとって胆沢エミシは目の上の瘤のような存在であったということである。故にその排除のためには大規模な征討軍の投入さえいとわなかった。

延暦8年（789）に胆沢地方に対して行われた「征夷」[9]は、地の利を生かしゲリラ的戦術を用いた阿弖流為ら率いるエミシ側の勝利に終わったことはよく知られている。しかし度重なる戦闘は次第にエミシ側を疲弊させていった。

延暦21年（802）、造胆沢城使坂上田村麻呂を中心として、水沢市佐倉河、胆沢川右岸の北上川との合流点付近に胆沢城が造営された。胆沢城造営に先立ち、駿河・甲斐・武蔵・上総・下総・常陸・信濃・上野・下野等の国々から4千人の浪人が胆沢に移住させられており、おそらく胆沢城造営の労働力となったであろう。

胆沢城がまさに完成せんとしていたであろう延暦21年4月、胆沢勢力を率いた阿弖流為・母禮が田村麻呂のもとに降伏する。度重なる戦乱とそれに伴う疲弊、また外縁の勢力は既に朝廷に組みするようになっていた状況で[10]、とりつく島も無く降伏に至ったものと思われる。その後両名は田村麻呂と共に京へ上り、河内国杜山（もりやま）で斬首された。

その翌年立て続けに志波城が造営され、一挙に北上盆地北部まで律令支配が及んでくる。律令支配の拡大と呼応して土器様式もそれまで客体的存在であった轆轤成形土器が主体をなすようになる。律令国家とエミシとの戦争は現岩手県域の人的構成や社会情勢を大きく変貌させたのである。

(2) 稗貫地方の古代遺跡と薄縫郡の成立

稗貫の初見は、『日本後紀』弘仁2年（811）正月11日条に「陸奥国に和我、薄縫、斯波三郡を置く。」とみえる。北上盆地北部に令制郡が設置されたことを伝える記事であるが、稗貫地方は南の和我、北の斯波地方との間に山地などは特になく、建郡時の郡境は地理的障壁に規制されず設定された側面があると考えられる。建郡以後、和我・薄縫・斯波三郡とされた地帯に居住する人々は律令国家にいかに支配されていくことになったのであろうか。

一般にエミシ系住民は城柵の直接支配下に置かれていたものと考えられる。和我、薄縫、斯波に居住していたエミシ系住民は建郡以前も以後も城柵、具体的には志波城の管轄下にあったであろう。その後、弘仁2年閏12月に文室綿麻呂が志波城行政機能の移転を奏上、勅許されて[11]、弘仁3年の4月以前には矢巾町徳田の地に徳丹城が完成する[12]。これより後はエミシ系住民は徳丹城の支配下に置かれることになった。

上記の三郡については『和名類聚抄』に郡名がみえず、郡衙所在地も不明であることから、「権郡」などとみなす考えがあった。だが、斯波郡については『延喜式』神名帳に「斯波郡一座」として「志賀理和気神社」が掲げられていることから、一般の令制郡として斯波郡は存在していたとみなすべきであり、他の二郡も同様に存在していたと思われる。

胆沢城造営に際しては、駿河国などから浪人4千人が移住させられてきているが、志波城造営の際には移民の行われた形跡は文献には見受けられない。[13] だが和我・薄縫・斯波三郡が存在していたとするならば、郡は公民の管轄を司る組織であり、建郡の前提には移民があった可能性も推測できる。

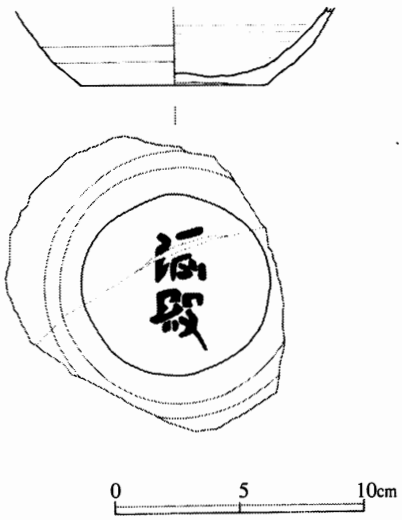
稗貫地域についてみれば9世紀に入ってから、即ち律令制的支配が北上盆地に及ぶようになって以降、新たに花巻市似内・上似内遺跡・庫裡遺跡[14]などの集落が出現している。また花巻市小袋Ⅰ遺跡においては「山本」と墨書された坏の出土を見るし[15]、同市円万寺館遺跡では「大井」「大井寺」と墨書された坏が出土している[16]。また2001年度に調査された北上川左岸の氾濫平野内の微高地・石鳥谷町稲荷遺跡において「小田」と刻書された内黒の坏が2点出土している[17]。「小田」が仮に陸奥国小田郡に由来するものであるとすれば、小田郡は軍団の所在地でもあったから、そこからの軍団兵士などの人の移動も想定することができる。

これらの墨書文字が地名を意味しているとの根拠は今のところ見いだせないが、9世紀に入って以降集落が出現するという状況をも加味すれば、案外に史料の語らない南方からの人の移動があった可能性もあるのではなかろうか。だとすれば、それらの移民を支配していくためにも郡が必要とされていたと考えることができるだろうし、”薄縫郡衙”の所在地に関する検討も必要となるであろう。

(3) 方八丁出土「酒殿」の墨書土器について

昭和41年度(第二次) 調査の際に、底部に墨書文字の書かれた土師器坏が出土している（第11図)。これは未報告資料であり、出土地点は不明である。このたび花巻市教委博物館建設推進室のご厚意により実測・掲載させていただいた。資料は大きく二つの破片に分かれていて、底部から体部にかけて残存し、口縁は欠損している。底径は7.4cm、残存器高は3.1cmを計測する。内外面ともロクロナデのみで再調整のない赤焼坏であり、底部は回転糸切り無調整である。

墨書は底部の中央に縦に二文字書かれている。一文字目は割れ口と重なっているため一部欠損しているが、部首は明らかに三水偏であり、「酒」と読むことができる。二文字目は墨が薄くなっているためにやや判読し難いが、「殿」と読めそうである。即ち「酒殿(さかどの)」と墨書されているとみられる。[18]



第11図　墨書土器「酒殿」実測図

酒殿とは酒を醸造するための殿舎であり、朝廷の酒殿は造酒司が統括した。また神社の境内や貴族・地方豪族の私邸内に設けられた自家用の造酒所も一般に酒殿と呼ばれていたという。

岩手県内において酒に関わる墨書土器の出土例は2件が知られている。一つは志波城跡の昭和52年度調査の際にＳＩ367竪穴住居跡のカマド脇床面から出土した土師器坏である。ロクロ成形で内面黒色処理されており、底部に二文字の墨書がある。文字は「酒所」と判読されている。[19] もう一つは胆沢城跡第38次調査の際にＳＫ531土坑から出土した土師器坏である。底部に二文字の墨書があり、「酒所」と判読されている。[20]

本県で酒に関わる墨書土器の出土は事例自体が少ないものの、城柵という律令国家の施設に限定されている。このことから方八丁において「酒殿」墨書土器が出土している意義は大きく、方八丁遺跡が律令国家の官衙として機能していた時期のあった可能性が推測されるのである。また胆沢城においては正月と五月の節会の際に「俘饗」を行っていたというが、律令国家の対エミシ政策三大基本方針の一つである「饗給」(宴を開いて酒食でもてなす）という懐柔策の場として、方八丁が機能していたことも想定させる遺物ということができるだろう。

(4) 宮野目方八丁遺跡官衙説

宮野目方八丁遺跡は、方八丁という国府や郡衙を想起させるような地名と相俟って、律令国家の官衙跡である可能性が昔から考慮されてきた。この度報告した「酒殿」の墨書土器の存在や、大きな柱穴堀方もまた方八丁が一般の集落とは異なり、官衙的遺跡であることを推測させる。仮に方八丁が左様な官衙施設であるのであれば、城柵ではないのであるから、自ずと郡家遺跡の可能性と、雫石氏の述べられた駅家の可能性とが想定されてくる。9世紀代の岩手県域には、磐井・胆沢・江刺・気仙・和我・葦縫・斯波の7郡の存在が史料上確認できる。方八丁が郡家であるとすれば、葦縫郡家である可能性が想定されるだろう。

現在、岩手県内において郡家遺跡は未だ確認されていない。而るに考古学的には多量の墨書土器・木製品・木簡が出土した江刺市落合Ⅱ遺跡[21]が江刺郡家と関わりがある、乃至は郡家近隣の遺跡と考えられている。また多量の墨書土器が出土した北上市下谷地B遺跡[22]も同様に考えられている。最近では、底部に「厨」と墨書された須恵器坏を始め、多量の墨書土器が出土している陸前高田市の小泉遺跡[23]が気仙郡家ではないかとして注目されはじめた。なお小泉遺跡の坏は、底径が7.0cm程と大きめのものがあり、9世紀前葉の遺物とみられる。また文献史料においては、先に引用した『後紀』延暦23年5月10日条の斯波城と胆沢郡間に駅が設置されたことを伝える記事が注目されている。即ち斯波城と胆沢郡間の距離が具体的に示されていることは、定点としての胆沢郡家の存在が前提にあるのではないかというわけである。[24]以上いずれにせよ、県内において郡家遺跡が存在しているのかどうかは、今後の遺構の検出など考古学的裏付けを待つよりない状況にある。

従って葦縫郡家の所在地についても明らかとなっていない。しかし先に述べた如く郡が存在している可能性を想定できるし、また城柵の中で一番面積的規模の大きい志波城が徳丹城に遷地した際に規模を縮小しているのは、和我・葦縫・斯波三郡の設置を前提として、志波城の公民支配とエミシ支配の機能を徳丹城と三郡とに分化させたためと理解できるから[25]、この点からも郡家の存在は想定されてよいだろう。特殊な遺物、遺構の存在する方八丁遺跡については、今後殊に如上の点－郡衙か、駅家か、それともそれらとは別類型なのか－を十分認識した上での調査が必要になると考える。

まとめ

最後に以上で報告してきた点をまとめておく。

1．遺跡は二重土塁の長さからすれば、面積的規模が巨大とみられる。『全図』には南北700m、東西300mに至る規模との認識が示されている。
2．長大な土塁と堀がめぐらされている。また自然地形である河道や旧河道の如き落ち込みが堀として機能していた可能性がある。ただし土塁・堀ともに機能していた時期は不明である。
3．遺跡内部には9世紀前葉の住居跡・溝跡が存在する。また掘立柱建物も存在するが、その具体の時期は不明である。
4．立地の特質を指摘できる。方八丁は低位段丘の縁辺に位置しており、時代を問わず、より下位の北上川氾濫原野に所在する集落を一望できたと推測される。さらに北側の集落についても見晴らしが利いたとみられる。
5．遺跡内には時期の具体に特定できる遺構とそうでない遺構とが混在しており、また佐渡川古墳群のような具体的性格の不明な遺構も存在していることから、複合遺跡である可能性がある。
6．官衙遺跡である可能性を示す9世紀前葉の遺物がある。

恐らく方八丁の名前の由来となったであろう長大な土塁と堀は、それが機能していた時代には大きな意味を持っていた施設であっただろう。残念ながら今次調査においてその機能時期を特定するには至らず、それが官衙に附随する施設であるのかも今のところ不明である。ただしこれまで述べてきたように、方八丁が律令国家の官衙遺跡である可能性を捨て去ることはできない。よって今後の調査の際にはその事を十分考慮する必要性があるし、また新知見の増加にも大いに期待したいところである。

註

(1) 板橋源『宮野目方八丁調査報告書』(花巻市教育委員会、1956)

(2) 板橋源『岩手県花巻市宮野目方八丁第一次発掘調査略報』(岩手県教育委員会、1966)　実際は第二次の調査である。

(3) 板橋源・佐々木博康『花巻市方八丁第二次発掘調査略報』(花巻市教育委員会、1967)　実際は第三次の調査である。

(4) 雫石誠介「再び磐基駅について」(花巻市宮野目文化財保存会『宮野目郷土史談　中巻』、1957)

(5) 延暦23年(804)には、征夷の計画が存在した。『続日本紀』延暦23年正月19日条。

(6)『続日本紀』宝亀7年(776) 5月2日条。

(7)『続日本紀』宝亀8年(777) 9月15日条。

(8)『続日本紀』宝亀11年(780) 2月2日条。

(9)『続日本紀』延暦8年(789) 3月9日条。

(10) 菊池賢「38年戦争と蝦夷移配」(『岩手県埋蔵文化財センター紀要XXII』2003掲載予定)

(11)『日本後紀』弘仁2年(811) 閏12月11日条。

(12) 鈴木拓也「古代陸奥国の軍制」(同氏著『古代東北の支配構造』所収、吉川弘文館、1998)

(13) 越後国より米と塩とが「造志波城所」に搬送されたことは知られる(『日本紀略』延暦22年(803)2月12日条)。当時、人の移住が有ったか否かについては北陸系土器の出土などから議論されている。

(14) 中村直美『庫理遺跡発掘調査報告書』(岩文振報告書第302集、1999)、藤井敏明『庫理遺跡発掘調査報告書』(花巻市埋蔵文化財調査報告書第24集、2000)

(15)『第29回古代史サマーセミナー資料集　岩手県内出土古代文字資料集成』(2001)

(16) 千葉悟『円万寺館遺跡　平成7年度発掘調査報告書』(花巻市埋蔵文化財調査報告書第20集、1999)

(17) 星幸文『稲荷遺跡発掘調査報告書』(岩文振報告書第408集、2002)

(18) 酒井宗孝氏のご教示による。前掲註(15)資料参照。

(19)『太田方八丁遺跡－昭和52年度発掘調査概報－』(盛岡市教育委員会、1978)

(20) 前掲註(15)資料集掲載。

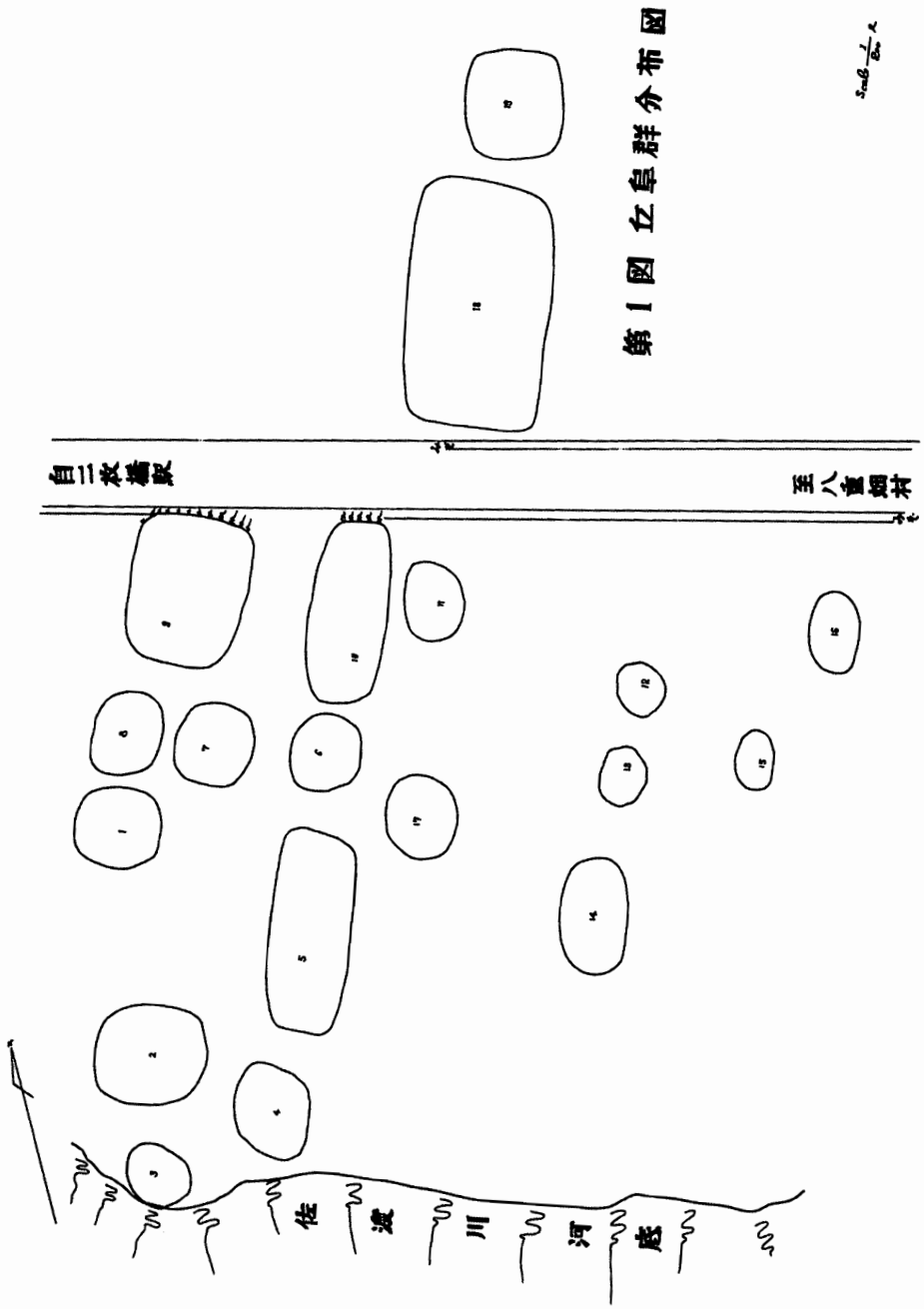
(21)『岩手県文化財調査報告書第50集　東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－VI－』(岩手県教育委員会、1980)

(22)『岩手県文化財調査報告書第72集東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－XVII－』(岩手県教育委員会、1982)

(23) 前掲註(15)資料集掲載。

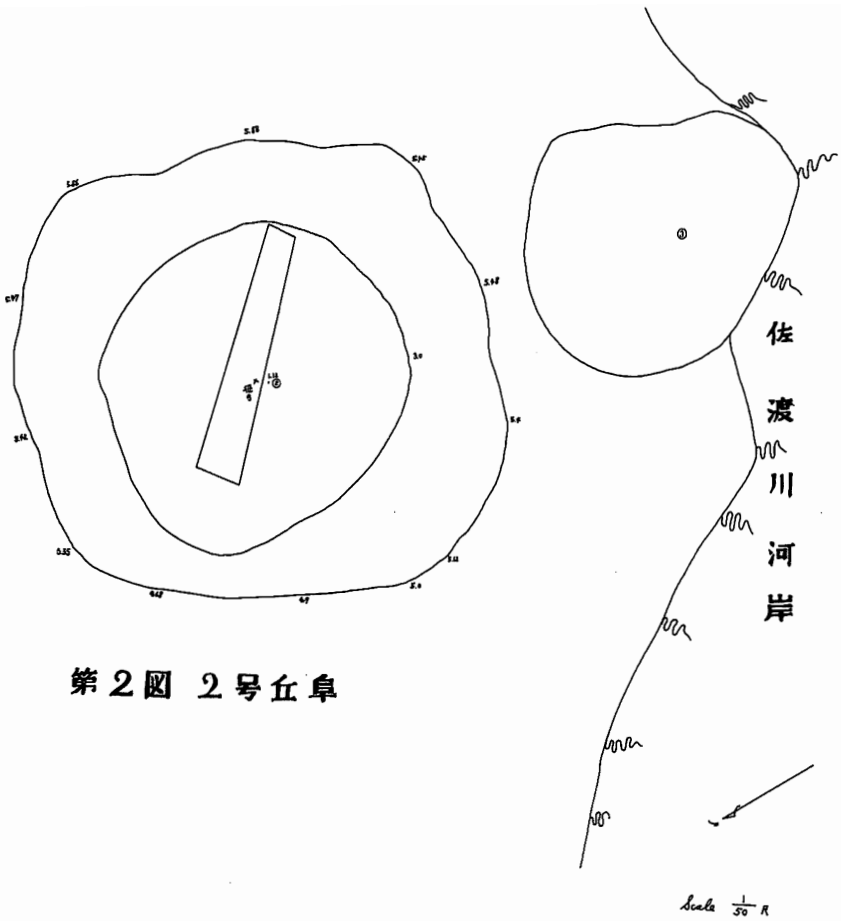
(24) 鈴木拓也氏、第29回古代史サマーセミナー時の発言。

(25) 樋口知志「9世紀の蝦夷政策」(『第28回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』所収、2002)



掲載縮尺600分の1(m)

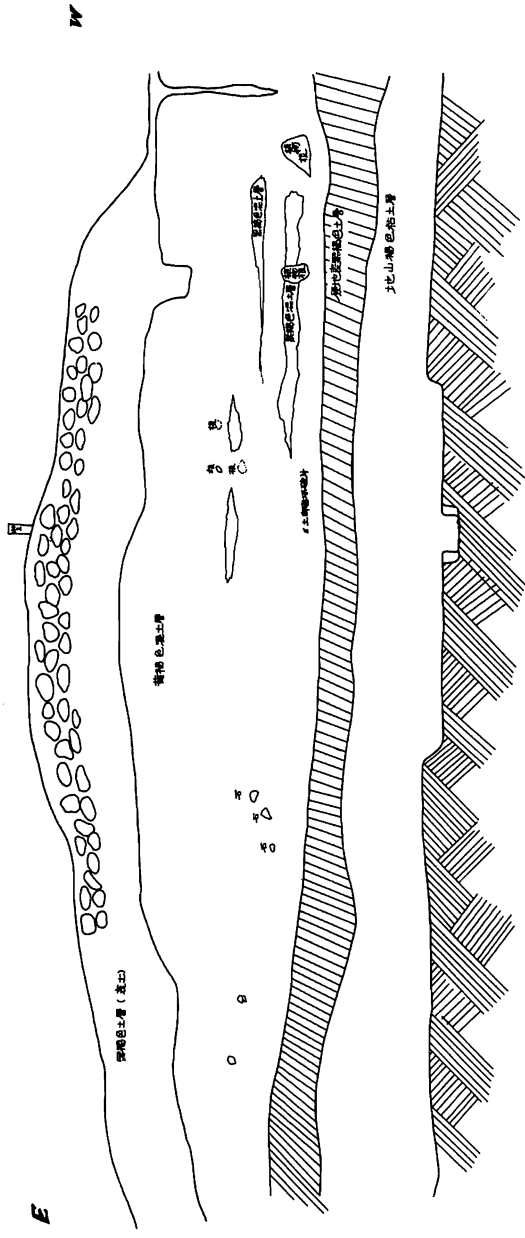
第12図参考図版　丘阜群分布図（板橋調査、1956年）



第２図　２号丘阜

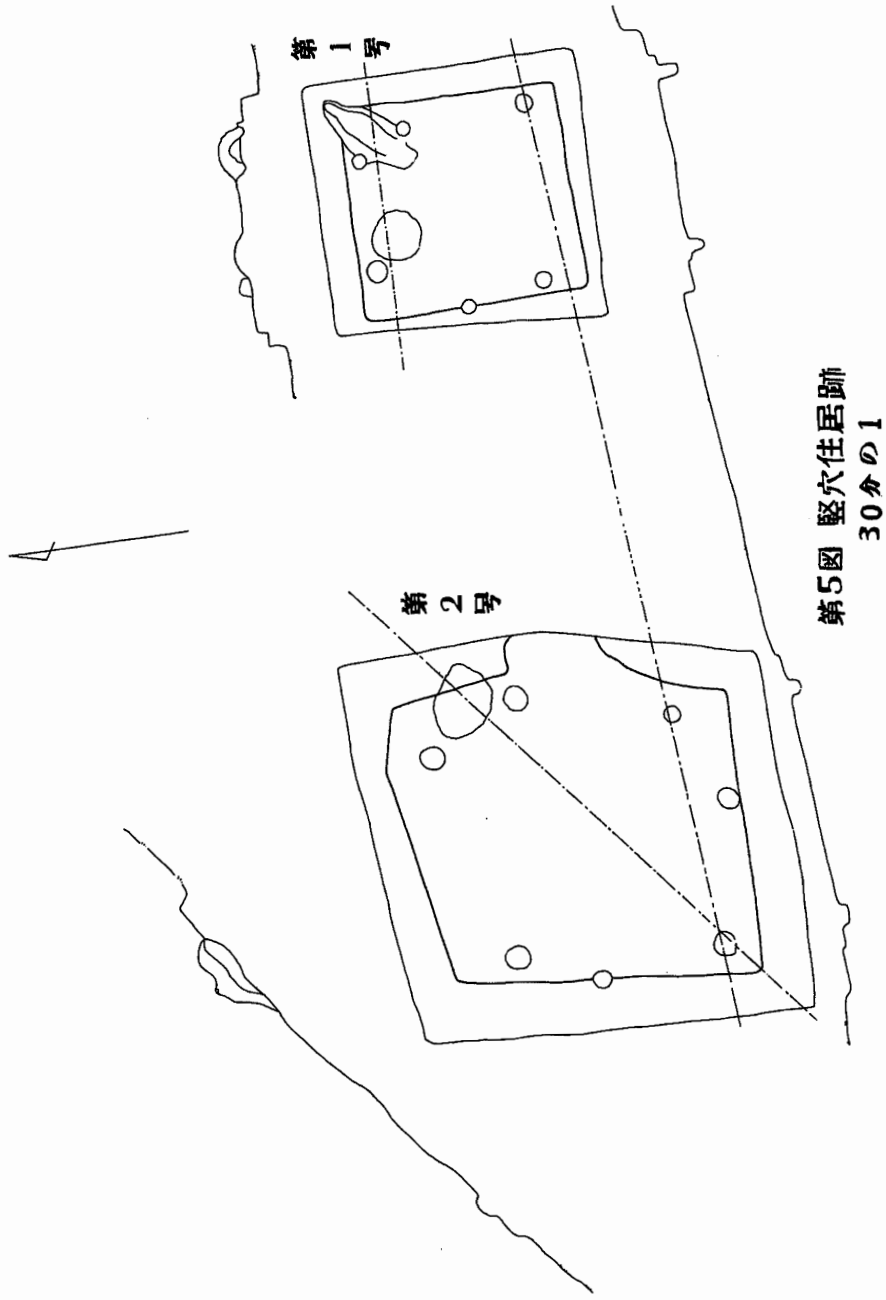
掲載縮尺150分の1(m)

第13図参考図版　2号丘阜（板橋調査、1956年）



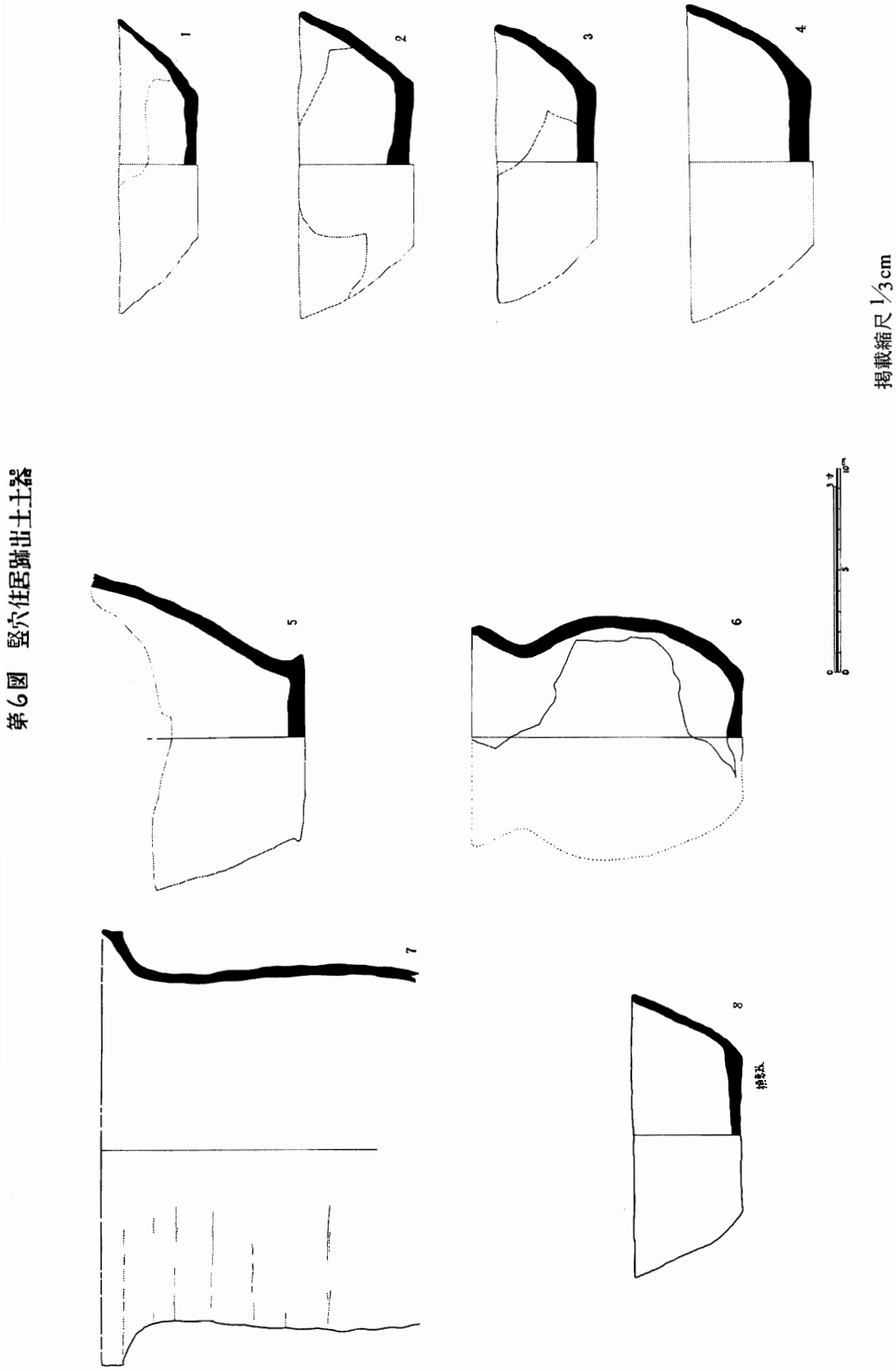
掲載縮尺30分の１(mカ)

第14図参考図版　２号丘阜断面図（板橋調査、1956年）

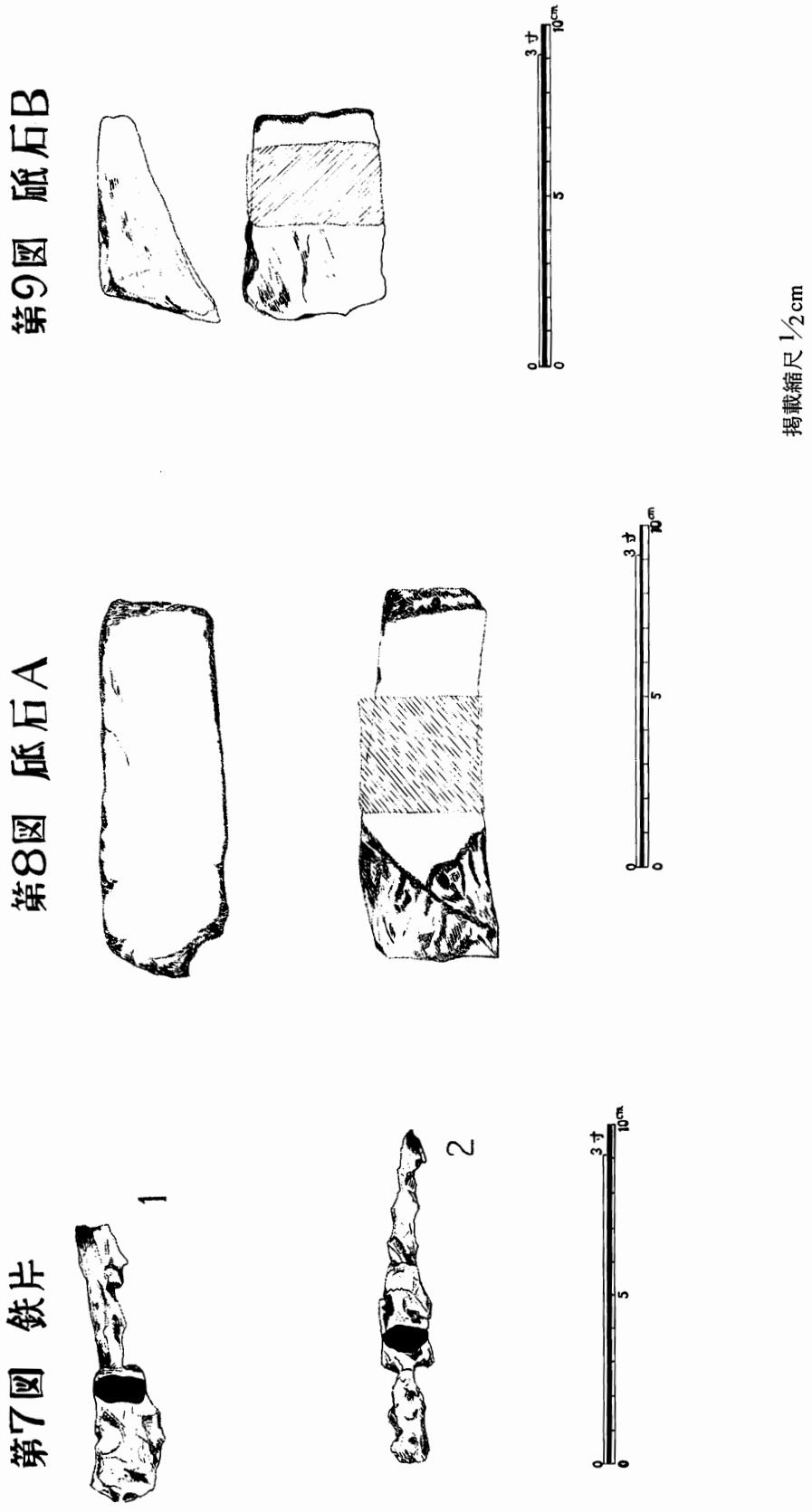


掲載縮尺90分の1（mカ）

第15図参考図版　竪穴住居跡（板橋調査、1956年）



第16図参考図版　竪穴住居跡出土土器（板橋調査、1956年）



第17図参考図版　鉄片・砥石（板橋調査、1956年）

写 真 図 版

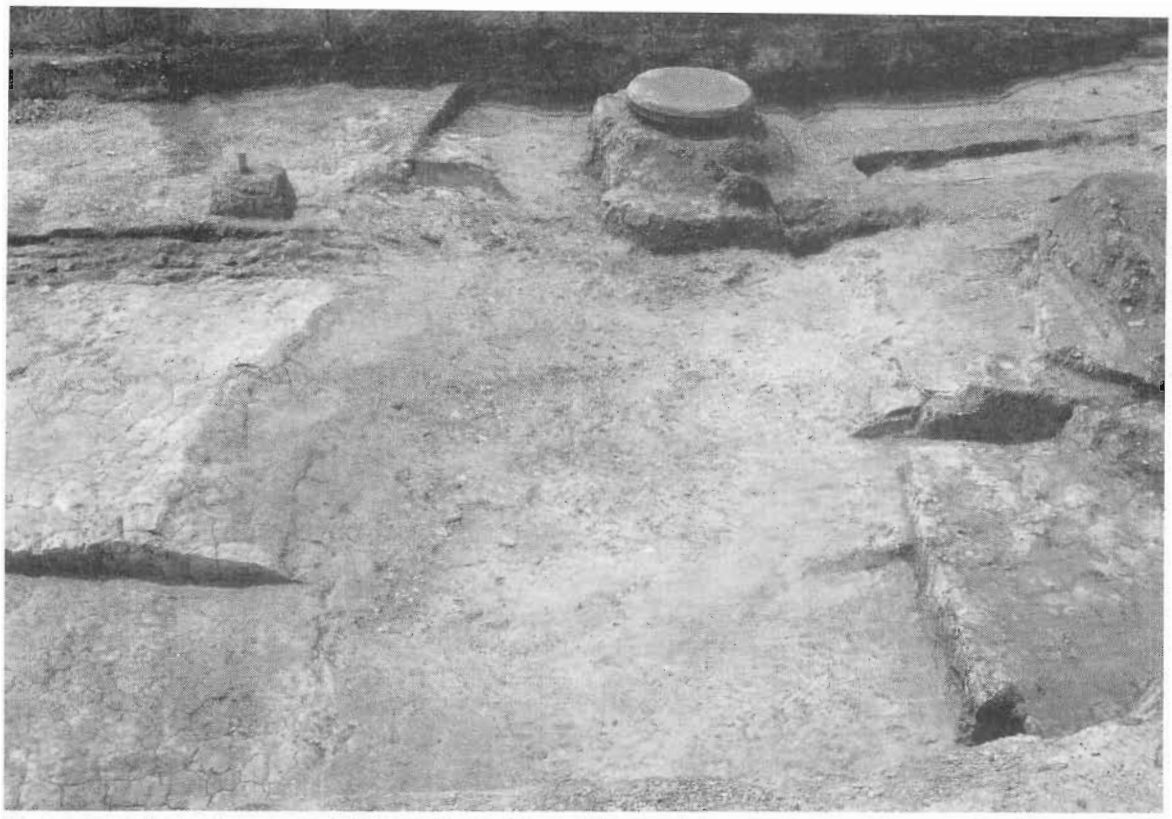
写真図版１　昭和２３年当時の宮野目方八丁遺跡（中央付近）

写真図版 2　宮野目方八丁遺跡全景（現在）

調査区刈払い前状況

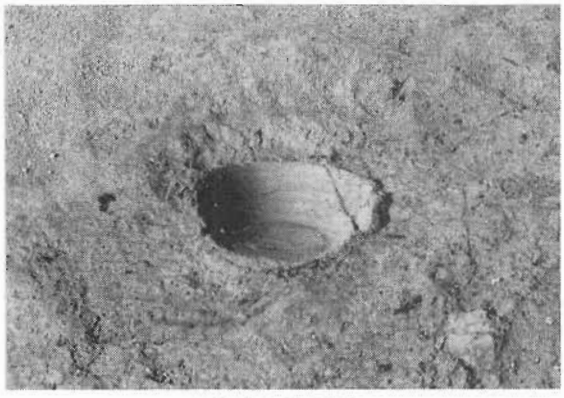
調査終了時

写真図版３　調査区近景

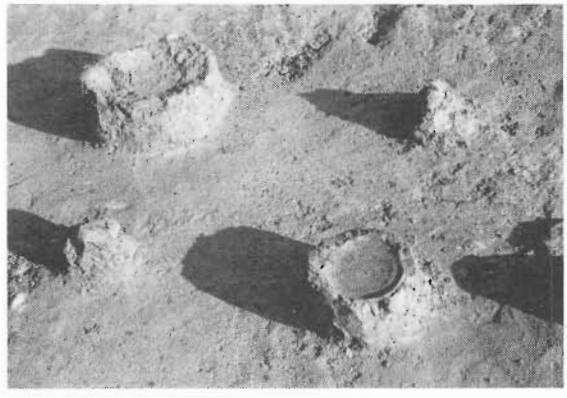


完掘全景（東から）

埋土土層断面（東から）



遺物出土状況①



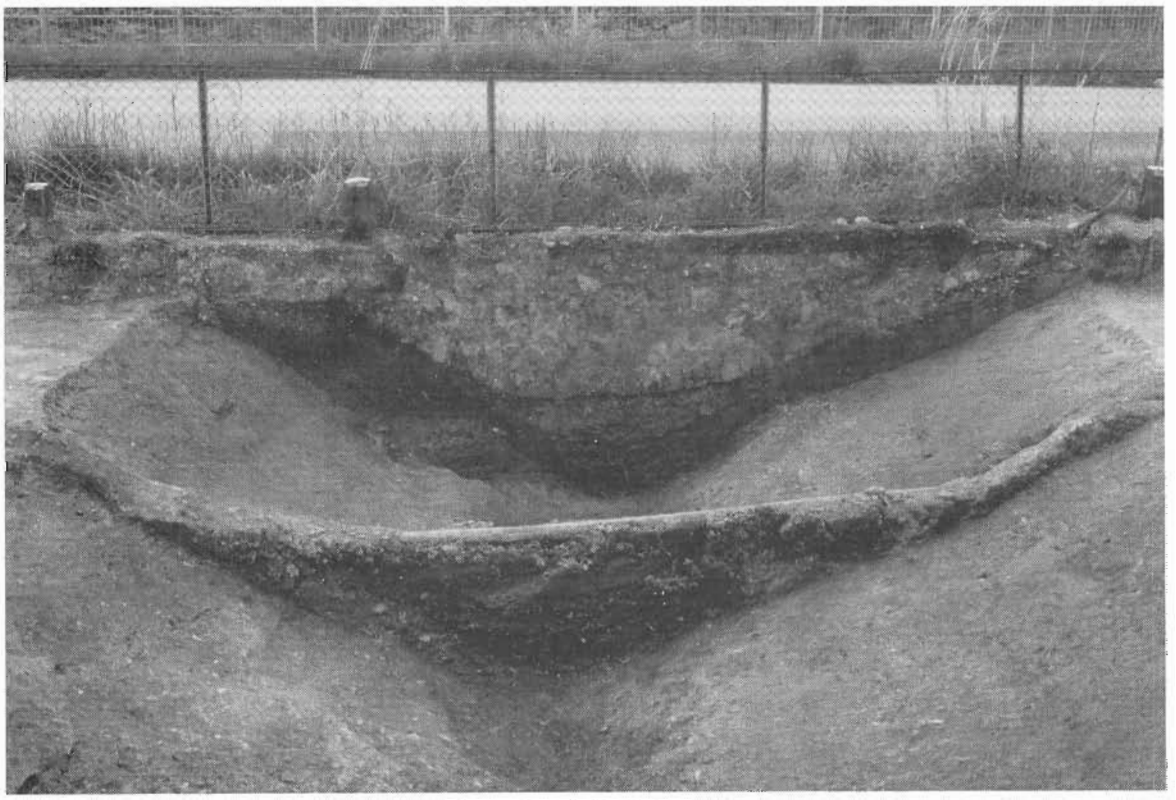
遺物出土状況②

写真図版４　SD01溝跡

完掘全景（東から）

写真図版５　ＳＤ０２堀跡・１

完掘全景（北東から）



埋土土層断面（東から）

写真図版6　SD02堀跡・2

SD02完掘

SKP 1 断面

佐渡川の谷（西から）

遺跡西縁

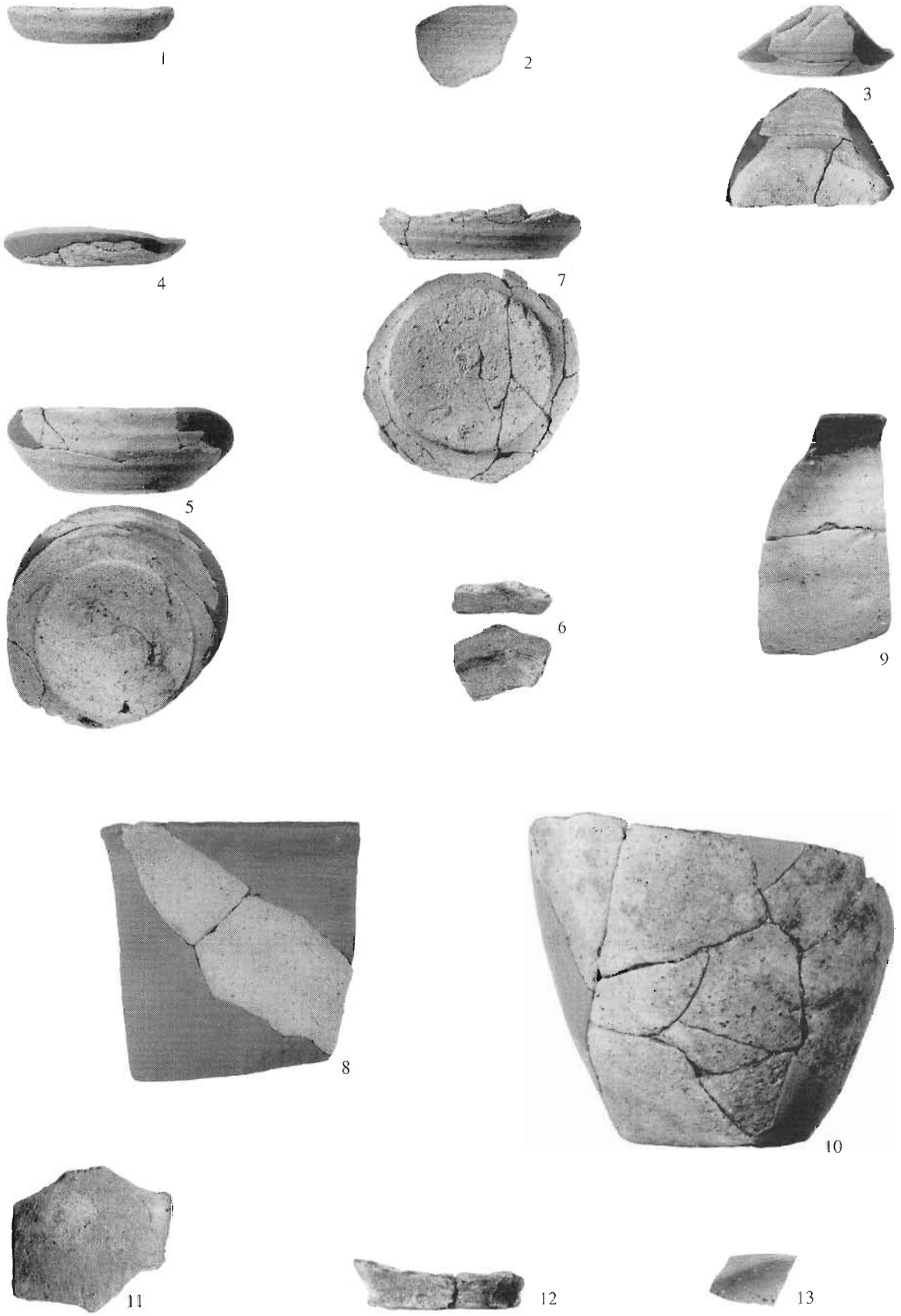
北側堀？

北側堀？

調査風景①（試掘）

調査風景②（精査）

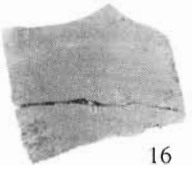
写真図版 7　調査風景等

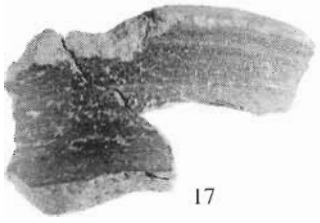


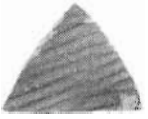
写真図版８　出土遺物（土師器）

14

15


16

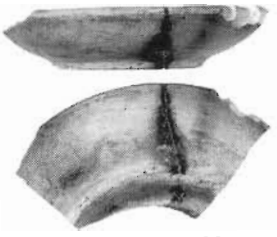

17

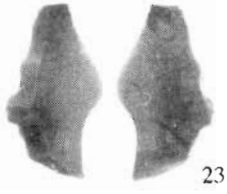

19

20

18

21


22


23

写真図版９　出土遺物（須恵器等）

報告書抄録

ふりがな	みやのめほうはっちょういせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	宮野目方八丁遺跡発掘調査報告書
副書名	東宮野目二枚橋線整備関連遺跡発掘調査
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第404集
編著者名	菊池　賢
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　電話019－638－9001
発行年月日	平成15年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやのめ 宮野目 ほうはっちょう 方八丁 いせき 遺跡	いわてけん 岩手県 はなまきしくず 花巻市葛 第1地割 68番1	03205	ME06－2269	39度26分45秒	141度9分00秒	20010507～20010604	850m^2	東宮野目二枚橋線整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みやのめ 宮野目 ほうはっちょう 方八丁 いせき 遺跡	不明	平安時代	堀跡　1条 溝跡　1条 柱穴　1基	土師器 須恵器	地方官衙遺跡の可能性がある。

平成14年度（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター職員名簿

所長	木村　昇
副所長	高橋正儀

〔管理課〕

課長	韮澤正吾
課長補佐	山崎善光
〃	山岸直美
主査	中嶋賢一
嘱託	高橋照雄
〃	加藤美代子
〃	湯沢邦子
〃	伊藤滋子

〔調査第一課〕

課長	佐々木　勝
課長補佐	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門員	小山内　透
文化財調査員	吉田　充
〃	亀　大二郎
〃	佐々木信一
〃	早坂　淳
〃	小松則也
〃	金野　進
〃	野中真盛
〃	金子昭彦
〃	阿部孝明
〃	阿部勝則
〃	羽柴直人
〃	高木　晃
〃	長村克稔
〃	星　幸文
〃	杉沢昭太郎
〃	村上　拓
〃	本多準一郎
〃	青山紀和
〃	西澤正晴
〃	村木　敬
〃	福島正和
〃	北村忠昭
〃	八木勝枝
〃	米田　寛
〃	丸山浩治
〃	北田　勲
〃	島原弘征
〃	中村絵美
期限付調査員	坂部恵造
〃	袰地　剛
〃	玉山健一
〃	吉田真由美
〃	小林弘卓
〃	長洞ひかり
〃	藤原大輔
〃	川又　晋
〃	太田代一彦
〃	江藤　敦
〃	立花公志

〔調査第二課〕

課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	赤石　登
〃	阿部眞澄
〃	飯坂一重
〃	鈴木裕明
〃	久慈泰彦
〃	（濱田　宏）
〃	安藤由紀夫
〃	星　雅之
〃	佐藤淳一
〃	半澤武彦
〃	皆川英香
〃	溜　浩二郎
〃	丸山直美
期限付調査員	齋藤麻紀子
〃	吉田里和
〃	菊池　賢
〃	立花　裕
〃	駒木野智寛
〃	原　美津子
〃	石崎高臣

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第404集

宮野目方八丁遺跡発掘調査報告書

東宮野目二枚橋線整備関連遺跡発掘調査

印刷　平成15年 2月21日
発行　平成15年 2月28日
発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
電話(019)638－9001　FAX(019)638－8563
印刷　株式会社　阿部印刷
〒020－0873　岩手県盛岡市松尾町2－2
電話(019)624－2242

©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003